

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9



291.6209  
Ak  
3



0347

都名所圖會

龍青龍

291.6209

Ak

3

都名所圖會卷之三目錄

喜多八重子氏寄贈

稻荷土師圖	左青龍
東福寺	稻荷社
新鮎野觀音	通天橋
三十三間堂	萬葉名所
修成院	同權現
大佛殿	矢教之圖
洛東陶工圖	岩源院
清閑寺	耳塚
桔主推測名所	小松谷正林寺
冬山正法寺	子安觀音
八坂法觀寺	庚申堂
高臺寺	豐國山
高臺寺	西大谷
伽羅觀音	音羽山清水寺
音羽山	大佛絳庭湯
音羽山	後白院御跡
音羽山	智積院
音羽山	田中社
音羽山	萬壽寺
音羽山	泉涌寺
音羽山	妙安寺
音羽山	寶生院
音羽山	新日吉
音羽山	繼信惠塔
音羽山	阿弥陀峯
音羽山	鳥龜山
音羽山	七觀音



安井觀勝寺

金毘羅推現

午王地社

菊水

下河原

蛙池

祇園社

二軒茶屋

花見圖

長樂寺

一心院

栗田天王社

東大谷

双林寺

真葛原

崇泰院

吉水

知恩教院

西行菴

圓山安養寺

石生石

白川橋

明智首塚

西行樓

佛光寺廟所

植髮堂

東岩倉

將軍塚

小般泥地

神明社

拂猿堂

長田首塚

天智天皇陵

四宮川原

小町寺

花山

蹴上水

苔集滅道

西本願寺拂坊

山林

深谷

蓮如上人塚

永觀堂

懸田梅

牛尾山

南禪寺駄勝

拂羽社

拂廟野

奉願寺御地

白川橋

拂懶

栗田天王社

來遠松

千葉寺

拂懶

崇泰院

住蓮安樂寺

鑑掛松

拂懶

圓山安養寺

墨若金戒院

萬遍慈恩寺

拂懶

西行樓

六文字送火

白川瀧

拂懶

二軒茶屋

八大龍王

赤山社

拂懶

菊水

白川瀧

勝林院

拂懶

金毘羅推現

高野川

八徵里

拂懶

午王地社

丈原里

勝林院

拂懶

西行樓

音金川

呂律川

拂懶

二軒茶屋

比叡山

日吉山王

拂懶

菊水

元黒谷

模川

拂懶

金毘羅推現

比叡山

日吉山王

拂懶

午王地社

来遠院

勝林院

拂懶

西行樓

寂光院

後鳥羽院塔

拂懶

二軒茶屋

比叡山

日吉山王

拂懶

菊水

来遠院

勝林院

拂懶

金毘羅推現

北山佛坊

北山佛坊

拂懶

西行樓

脊釐石

玉山社

拂懶

二軒茶屋

来遠院

勝林院

拂懶

金毘羅推現

江文社

古芙蓉阿弥陀寺

拂懶

西行樓

近江八勝遠景圖

江文社

拂懶

菊水

光俊

本  
二月  
夕  
午の  
あす  
いより  
りゆ  
めも  
たす





三の峰稻荷大明神也。あの大和大後伏見の山小あり。性者人皇十三代  
元明帝は御宇和羽四年二月十一日午の日、ふみ出殿。由々奉社。一  
宇賀御魂神身二素盞烏名身三大布殿上御中社四大神此二神後儀  
甚く五座と称。弘長三年に告ありて之承。年中に儀ます。又神祇  
又田中社の客人神大歲神へ齋と化して稻れ實を食んと奉祀。又  
はゆく小一切の事を歎く。成るべく色喜八年故賤太政大臣藤原胡野  
附平三國社を修造。又承亨十年に社後三の峯なり。今地移を  
より上の社へ宇賀御魂伴諸伴伴冊尊と定む。また二月れ初年集  
和銅年中二月初の午れ日出現。より恒例の素幸とさる食稻は御み  
うりて土參森栗等坂土産とともに古の神本の板の枝がどりて  
歸り家を收へ。

初年をよる

稻荷山の松坂の松坂なるもく人のやうに云ふ

於仲朝居

三四

三五峯の御宿連張の御祭正月八日而り。古山の御後小勝より今へ移て  
捨まつて。御宿のものもくとすまへ稻荷山七日のやりとくと云ひ。漢人を定  
稻荷り幸の時

周防内侍

いあらふ故アシテ。御祭主をとくとくあと施す。萬きり。周防内侍  
例祭の四月上の卯の日。神雲五星丸祭。御旅所。うち東寺南の大門  
を擅入て金堂れあれに神雲。五星丸。祭。御旅所。うち東寺南の大門  
缺ト。僧侶ハ。アリ。生て法施。東寺寺主勢の傍。アリ。モ。一。の  
衆僧ハ。東西。小列。一。弦弓。東の。之。鑿。及。其。巖。主。を。施。し。他。ト  
あ。之。鑿。ア。リ。一。是。東寺の。神供。ト。ア。近。承。安。承。三。甲。年。奉。之。奉  
神。鑿。ア。後。小。社。司。の。り。一。滿。る。と。供。奉。一。唐鞍。の。神。三。足。具  
外。大。幣。拂。醫。薦。蓋。錦。蓋。を。の。お。く。は。あり。魏。々。滿。を。そ。て  
壯麗。角。祭。式。あり。

東福寺



惠日山東福寺（ひのひやまとうふくじ）は五山（ごさん）の第四（よしよし）。大和太路（やまとおとせ）の擣杵（うすり）にあり當寺（とうじ）は開元六年聖一國師諱（ひ）の辨圓後別藁科（あらこ）れ人（ひと）なり十歳（じゅうさい）よりて玄台宗（げんたいしゆう）を學び十又（じゅうよ）才（さい）みそ三（さん）大妙衣終（おひしゆう）十八才（さい）みそ園城（えんじやく）あゆそ鑿取（さくとり）利東（りとう）大丈（だいじょう）の戒壇（かいだん）より受戒（じゅくさい）せりあるとた三井（さんせい）を歩く野州長樂寺（やしろちやうらくじ）ふりそ宋朝（そうじょう）小隨（こつづき）ひて別傳（べつでん）道伏（どうふく）すあじ程（あじきよ）その奥者（おくしゃ）伏極（ふきく）る依教（よきょう）人皇八十六代四弟院（よつぢいん）の御宇嘉（ごうか）元年（げんねん）に入唐（にゅうとう）。宋の徑山寺（けいざんじ）を學（がく）を師（し）とせり斬（ねり）て六手（ろくしゅ）と經（きょう）仁治二年（じんじつねん）秋帰（きか）胡（ご）せり寛元（かんげん）の差洛（さらわ）小乞（のびく）九条大相國光明峯寺殿（こうめいほうじでん）下より（さへり）國白（くわく）東福寺（とうふくじ）伏賜（ふしひ）く住職（じゅしょく）せり弘安三年十月十六日七十九才（さい）みそ遷化（せんか）と偈曰（ごじやく）利生方便（りじゆほんぱい）七十九年欲（よく）祐（ゆう）う十九十四代花園院（はなぞのいん）御宇正和（まさかずわ）の子（こ）め達（たつ）を聖一國師（せいいつこくし）と宣旨（せんし）を揚（あつ）る瓦園師（はいんし）比號（ひごう）へ是（ぜ）ようく（ようく）ゆるう達（たつ）當（なま）まは號（ごう）の南都東大興福（なんぶとうだいこうふく）の兩影（えい）を合（あわ）せ用（もち）ゆるあり山門（さんもん）母（め）の雲閣（うんかく）とつ木樓額（きのくわく）あり足利將軍義持（よじ）公（くわん）れ等（とう）あり



佛殿は本尊ハ釋迦佛法堂ハ潮音堂と號を額ハ玄宰筆より  
天井は蟠龍の初龜兆殿司は掌すけ人太道和尚才子みく  
諱ハ明兆字ハ吉山より凡まる繪小舟めあらタ記小遊あら龍  
を画へ天小舟び不動とゆるそひ火燐りえらるとうや或も龍を画  
に天子身の形を乃と頑くハ佛神生身の形を見せめゆ人と  
持念せり小思園池は水漲上り生身は大龍目前よ出現せり其形を  
仰て天井又画兆殿司滅後小画龍也び歩く登天もと云傳入  
其後狩野光穎是を画今は蟠龍あれより當寺は涅槃像の應永  
十五年六月殿司又十七歳少一て画なり殿云みあら奉朝姫又乃  
像うして世ふ名高し具朴當寺に圓畫多一一生画る繪具朴感  
を漫て描る山の小より歩る今繪具谷と云  
方丈は額ハ張即之の筆選佛場の額ハ徑山無準れ筆く本尊ハ  
文殊菩薩聖観音般若菩薩及當寺の鎮守成就宮と云  
石清水かく  
春日御宿山王

光明峯寺殿は建立より東司の額ハ張即之の筆十三重塔  
比良明神は告小よりて藤丞相道家公より以建る圓柱は古樹の圓山  
圓柱宋圓柱は勢多厨は高梁も唐木みてさすとも異云もうゆる  
常樂房は額ハ光明峯の筆謐聖一圓師は勅額ハ持明院は震  
筆あり祖堂は中央ハ達磨百丈禪師臨濟禪師の像を安置  
後壇みハ光明峯寺殿下は經徑山無準禪師の像あり傳衣閣又  
毘沙門天藥師觀音を安て星宿山の昭堂より  
當寺建立の初より  
圓柱の幾うて  
春日御宿山王  
通天橋は額ハ普明圓師は筆橋下の溪を洗玉廻といふは不とうに  
相氣一秋のそり紅錦北魚あらくを海揚乃寄紀とする十月  
十六日ハ圓山忌より俗ニ毎當納と云  
五大堂又ハ不動明王と安慶正月廿八日火災除滅のれを失た文字方足  
萬壽寺ハ當山は小門三重あるの因より首の六系坊門もあり五ふ乃

泉涌寺





泉涌寺物門  
新熊野社

東山泉涌寺の大和大源の擣れ本にあり當寺の初ハ弘法大師ハ開基なり其後文德帝ハ御宇齊衡ニ承小左大臣猪嗣公再建ありて天台宗と云々仙遊寺と號を此ふより人ねびしゆき中興の開山ハ後薬法師號ハ戒禪院より日本天台真言禪律ハ四家弘圓學と當山の麓小靈泉涌生一ノ木也號を泉涌ると改む極後彷法跡ハ肥後國飽田郡の人きり仁安元年八月誕し西うそ天台法龜の孫曉が才子として十八歳を落第一十九才にて左寧府に親あるあひて具足戒をうけ三十三歳も傳家承繼んくも宋圓に見たり四十六才みて嘉定四年二月廿八日帰朝せり建保六年に和州の刺史中魚信房が崇教小町にて我終地泉涌寺を寄附せりまくら當寺より住職して後極川院の清宇嘉祐三年閏三月八日六十二才みて往化せり

天子れ官寺と云ふハ八十代四條院を權寧とせりは帝陵延の附

我禪々々と宣り後彷我禪和尚再生して天子の位より四條院と  
出誕しゆすよ一人の夏に立人立を是より未代れ帝當山

葬奉る後前帝祚主殿の前にあり

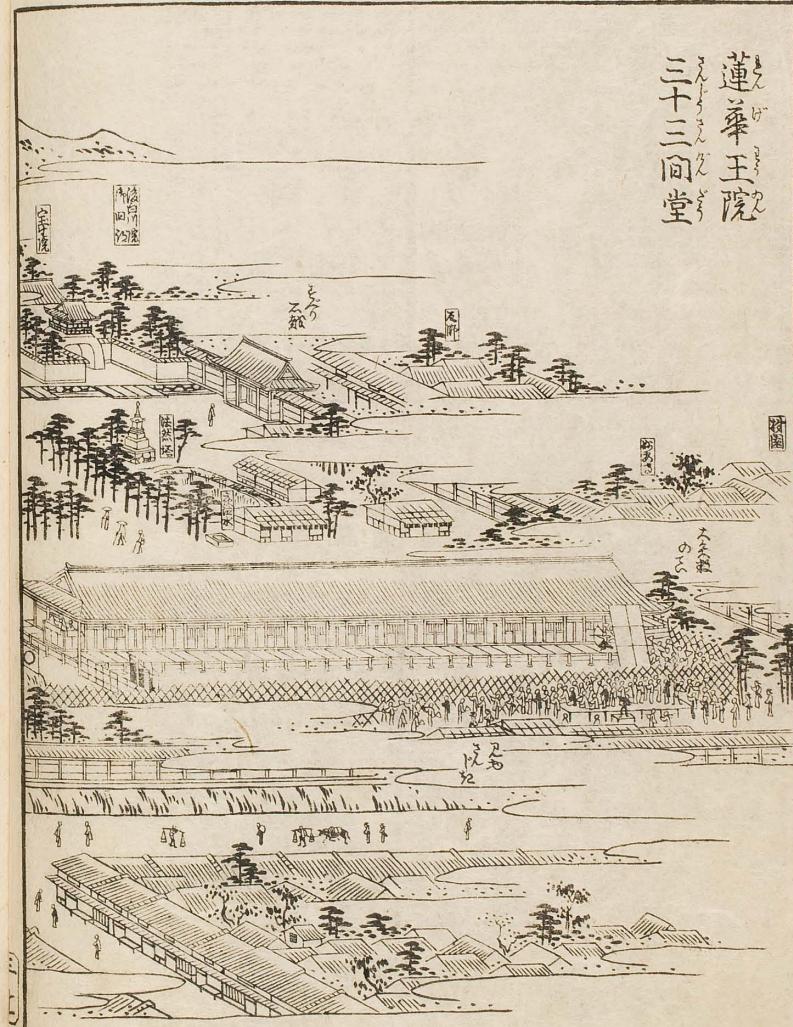
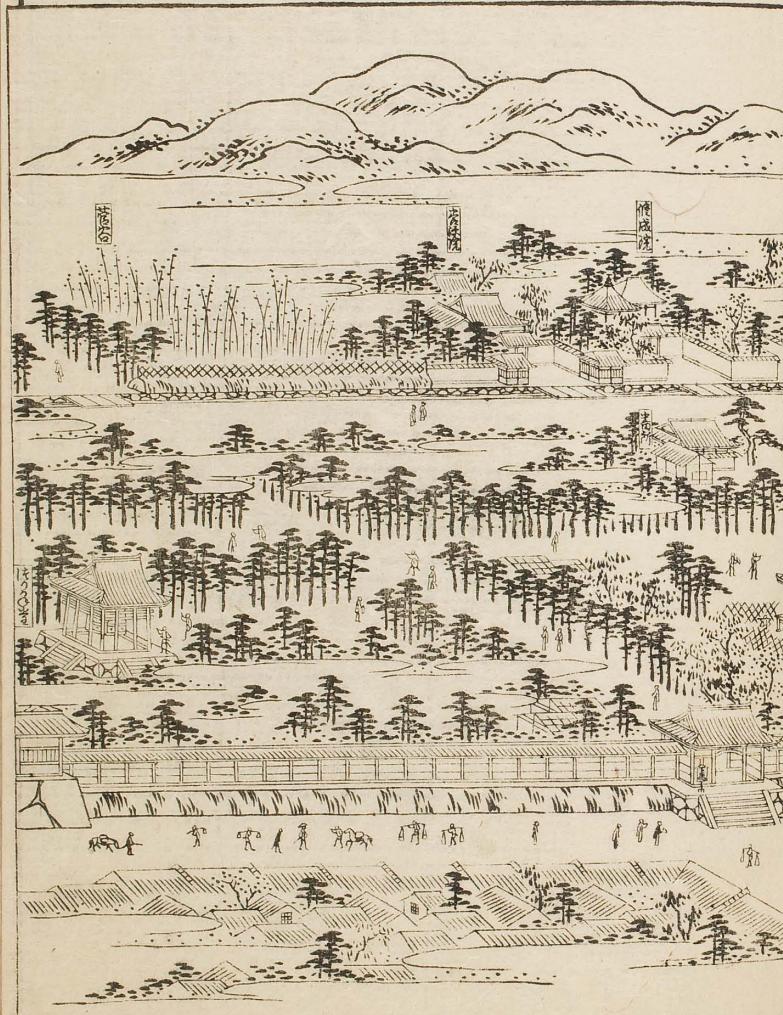
佛殿の奉尊ハ弥勒釋迦阿弥陀の三尊を安置し東面と額ハ

張郎之の筆也

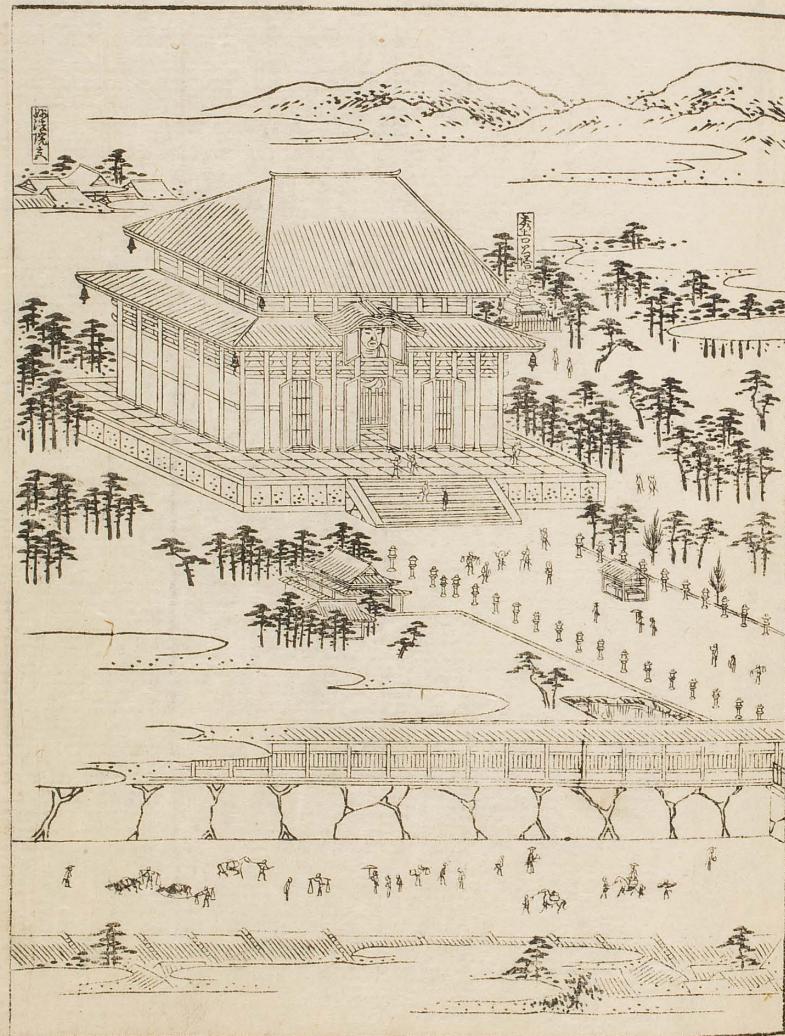
舍利殿の奉るハ佛牙の舍利也二重の金塔より安坐し此佛  
牙由來ある佛涅槃入滅時羅刹足疾患ひて竊ひて  
佛牙を掠奪し一粒草駄天悔悟をくくへて益夜小劫之  
身を放し終りて佛滅後一千六百余年を経て大寶向毛道宣  
律師戒香薑修持感應も通じたりと草駄天の心を承り  
三皈八戒をうけにて其報恩は此佛牙取づけたりまつて人目に傳り  
白蓮寺小納め金閣の寶函より施しゆけと日奉に度すより當山中  
興の開基優秀法師は宋國小僧也と號すと慕ひて

白蓮寺小詣赤栴檀を供ひて佛牙を恭禮し作信也あまう竊小舍  
利放縫をよし述々也叶ひて空く奉り小帰し猶志於もゆき  
かまひて入唐一二階の樓門三重竹塔等をままで袖種衣深澳ふううるゆ  
きくは唐軍小至りハ白蓮寺の修造成就し大元名譽源の志成也其  
後の凡人小至り奉紙をして酬答を來賓すはとくも元金一圓す  
しご星次万里渡海來懐ハ偏小佛牙の求請小至り二枚奉納乃素額  
志すまく舍利の利益をもつて奥小述され忽佛牙の付属をゆき  
たり歎喜の涙をたれて帰帆の纏をうながして人きく彼拂舍利を奉  
朝小内一當寺の法師と崇まつる

觀音堂は本尊聖觀音者ハ玄宗皇帝楊貴妃小別乞ゆて追善乃ち  
妃の貌をうけしと極りゆす補陀落山の額も山帝社龕之也の事也  
新熊野觀音ハ弘法大師の化す西園順礼觀音の具一き  
新熊野社ハ後白川法皇也御坐りて紀州熊野之所授也と觀音也



蓮華王院  
三十三間堂



蓮華王院

三十三間堂へ後白川院の御願とて備前守平忠盛奉りし

千體佛堂故建立之(堂東向南北六十六尺二弓)御廟て奉るに千手觀音乃

坐像にて拂丈八尺位の座慶寺二十八尊衆おのく壇上に安置

千手觀音一千體の堂内左右より一通(運慶)運慶は古地あり

桺後白川法皇へ常に頭痛れ拂(御)坐せば醫療(御)坐ぐきり

クも具驗(御)文(御)あ(御)體弱(御)御幸(御)坐(御)は(御)祈(御)う(御)

權現(御)宣(御)す(御)浴場(御)圓滿堂(御)天皇(御)御(御)醫(御)あり(御)ノ

治癒(御)坐(御)ゆ(御)足(御)休(御)て承暦二年二月廿二日圓滿堂(御)參(御)し

シ(御)御(御)人(御)み(御)浴(御)も(御)夜貴(御)勿(御)経(御)と(御)ス(御)告(御)い(御)法(御)皇(御)

生(御)熟(御)而(御)あ(御)て莲(御)善(御)坊(御)と(御)人(御)海(御)國(御)紙(御)経(御)して佛道(御)修(御)め

真(御)薰(御)功(御)小(御)而(御)て今(御)帝(御)位(御)小(御)昇(御)き(御)り(御)そ(御)ど(御)前(御)生(御)の體(御)體(御)い(御)ま(御)ど(御)

ぞ(御)して山石(御)固(御)水底(御)小(御)有(御)り(御)其(御)頭(御)く(御)柳(御)の樹貫(御)て生(御)る風(御)吹(御)め

勅(御)搖(御)と(御)則(御)今(御)身(御)に響(御)て此(御)勝(御)紙(御)う(御)せ(御)り(御)あ(御)た(御)か(御)の堅(御)紙(御)と(御)え(御)苦(御)惱(御)

免(御)ノ(御)と(御)秀(御)紙(御)て法(御)皇(御)れ(御)頂(御)よ(御)酒(御)と(御)石(御)て(御)美(御)覺(御)う(御)れ(御)て(御)れ(御)

所(御)を(御)入(御)せ(御)て(御)み(御)河(御)底(御)より(御)觸(御)體(御)紙(御)て(御)腰(御)う(御)り(御)紙(御)親(御)は(御)頭(御)中(御)み(御)

三十三間堂(御)を(御)建(御)立(御)て(御)蓮(御)華(御)王(御)院(御)と(御)是(御)と(御)か(御)桺(御)の樹(御)紙(御)堂(御)れ(御)紙(御)

免(御)ノ(御)と(御)綠(御)起(御)意(御)又(御)或(御)之(御)鳥(御)羽(御)上(御)金(御)得(御)長(御)寿(御)院(御)を(御)造(御)當(御)ア(御)ト(御)一(御)千(御)

体(御)の觀(御)音(御)を(御)安置(御)と(御)後(御)改(御)て(御)蓮(御)華(御)王(御)院(御)と(御)號(御)モ(御)ト(御)テ(御)集(御)中(御)本(御)源(御)庵(御)

伊(御)佐(御)木(御)本(御)源(御)庵(御)堂(御)前(御)ヨ(御)夜(御)涼(御)泉(御)ア(御)傍(御)に(御)池(御)あ(御)り(御)裏(御)の(御)そ(御)く(御)れ(御)及(御)下(御)20

30(御)燕(御)子(御)飛(御)来(御)と(御)濃(御)む(御)よ(御)だ(御)の(御)庭(御)の(御)面(御)小(御)鹿(御)く(御)京(御)師(御)は(御)發(御)客(御)迎(御)

茶(御)店(御)小(御)宴(御)紙(御)して(御)終(御)あ(御)り(御)紙(御)第(御)賞(御)と(御)當(御)寺(御)の(御)佳(御)境(御)

大(御)坂(御)の(御)鹽(御)觸(御)新(御)然(御)體(御)志(御)あ(御)別(御)當(御)梅(御)坊(御)村(御)佛(御)と(御)好(御)く(御)接(御)的(御)

場(御)通(御)帰(御)よ(御)當(御)され(御)度(御)に(御)体(御)射(御)刃(御)一(御)丈(御)連(御)年(御)詣(御)候(御)の(御)居(御)生(御)

村(御)佛(御)打(御)參(御)紙(御)事(御)當(御)所(御)う(御)通(御)矢(御)の(御)檢(御)證(御)と(御)其(御)一(御)を(御)蒙(御)う(御)み(御)金(御)紙(御)付(御)

を(御)渡(御)尾(御)引(御)の(御)學(御)勤(御)な(御)八(御)千(御)寄(御)通(御)一(御)貞(御)享(御)二(御)年(御)四(御)月(御)廿(御)七(御)日(御)紀(御)州(御)和(御)

基(御)八(御)席(御)總(御)一(御)万(御)二(御)千(御)五(御)十二(御)通(御)矢(御)八(御)千(御)百(御)二(御)十二(御)枚(御)よ(御)て(御)得(御)

新吉社へ後白川院は御勅請あり舊地へ星々を立てて日吉坂と  
今度より所あり應仁の乱に破壊を其後お法院堯然法親王再

建

ノ例祭は毎年四月廿九日にて又ある日には御靈宮御終の神事  
知積院の宗旨真言新義より本尊は不動明王興教大師社殿の用ひ

正憲法印當主は豊臣秀吉公す棄君早世せるふ祥雲寺と茶創ある

紀州根来寺滅て後光贊の断絶から新義の徒星紙歎て

御當家に慈祈と果ふ依て祥をあき賜て御積院と號し新義流の發安

養源院の宗旨五合より本尊は御院佛惠心作當院の清井傳和也

長政の草創みて岡山へ盛伯法不なり

修院の奉尊は元三太師像に歡喜天と安ら

寶生院の奉尊毘沙門天より後白川院の養新紙安立に

妙安寺の蓮華王院南れ門和田町北端小あり虛無僧の本寺と云

西國三十三別小属に達磨普化よりに祖師と云

樹園妙安寺の南にあり松永貞徳住ゆ一造然寺

大和大源の多々一太佛殿の南に妙安寺と名づけ名前見

実けうり紙摺と鉛子昂が去一法華經紙様みぢりをも千数すりそ

八千藏ようぞく人報恩益と造り御ひうは因陣付戸部に聖傳志子

達磨大師は佛家人九貫之定家紫式部の尼像とぞり一御法院

二品法親王堯然後をもせゆか紙四重ノ付戸部もと吟花廊とぞひ

芦の九度とぞも人やどひ中の八日そくまほ日小東光院殿玖山公泰勝院

玄旨法界比法宋の舍とぞだらん下署

貞徳翁童名勝鈴とぞいと九條殿下へまづ源氏お管紙後せられ

御津の序樹葉写序ゆく所少て今御功継タれば御奉跋し云

附書御室とぞる源氏のよもくせをあひどり三箇の大事止親の御詔手と

相承後御室とぞる源氏の連が御りに殿下うむ御手とくと御發付に

花小松道妙さんゆくゑの菊

表ハウニミテヒノヒメ袖

書とぞもす東野のきく咲すを

勝 無

九條殿下

空首法界

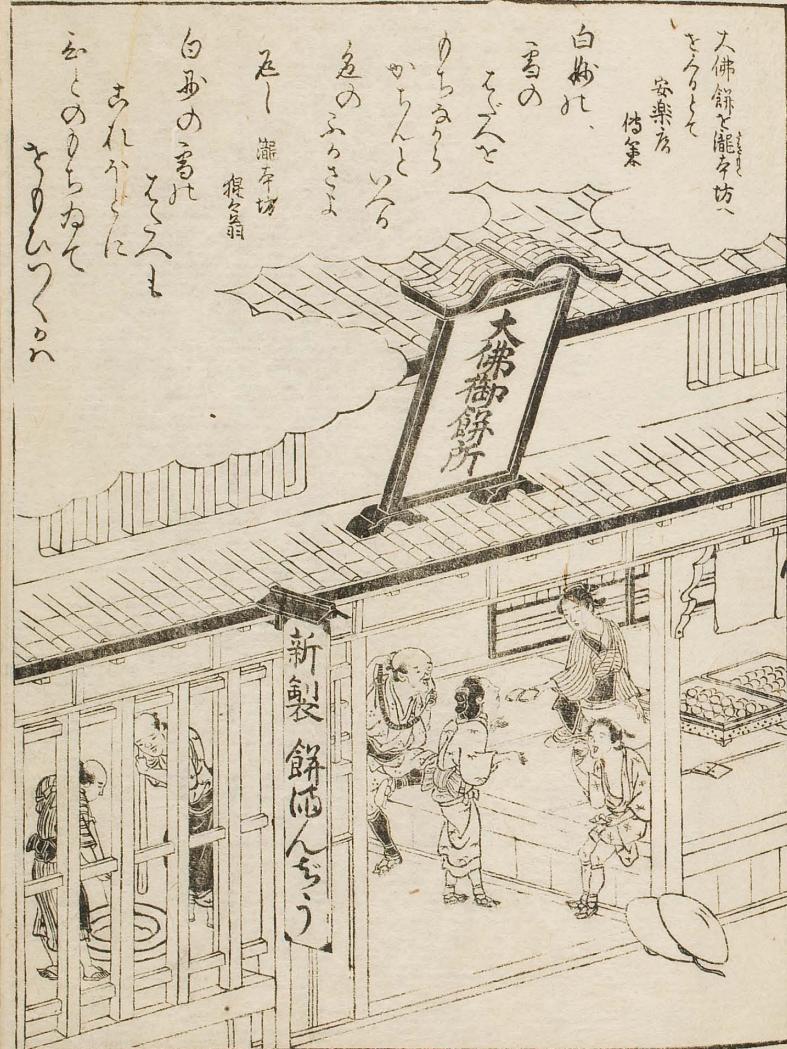
大佛殿方度寺へ後陽成院清宗天正十三年豊臣秀吉公は附建<sup>付</sup>也  
奉尊<sup>おんそん</sup>へ慮<sup>おも</sup>舍<sup>すて</sup>那<sup>な</sup>佛の坐像<sup>ざぞう</sup>清丈六丈三尺佛殿<sup>ぶつでん</sup>を西向<sup>にしむけ</sup>めて東西廿  
七間南北四十五間<sup>くわん</sup>うり樓門<sup>ろうもん</sup>又ハ金剛力士<sup>こんごうりし</sup>の大像<sup>だぞう</sup>紙蓋<sup>しがい</sup>長<sup>なが</sup>一丈四尺  
うり門<sup>うりもん</sup>の御<sup>ご</sup>小<sup>こ</sup>高麗<sup>たかま</sup>大<sup>おほ</sup>金<sup>きん</sup>造<sup>ぞう</sup>りて長七尺<sup>ながしちしゃく</sup>又<sup>また</sup>一丈四尺  
廻廊<sup>くわうろう</sup>ハ荀<sup>くじ</sup>山百七十石東西百間<sup>くわん</sup>うり堂前<sup>どうまへ</sup>又建<sup>たて</sup>石燈籠<sup>せきとうろう</sup>又ハ剣<sup>けん</sup>國<sup>くに</sup>  
諸候<sup>しよこう</sup>社名<sup>しやめい</sup>及<sup>およ</sup>刻<sup>こく</sup>む佛殿<sup>ぶつでん</sup>の卷石<sup>まきいし</sup>又正面石額<sup>まへめいせきがく</sup>の太石<sup>おおいし</sup>又ハ圓<sup>えん</sup>ヶ<sup>カ</sup>出所<sup>しゆしょ</sup>の名或<sup>ある</sup>ハ  
諸候<sup>しよこう</sup>の紋所<sup>もんしょ</sup>等<sup>とう</sup>あり廻廊<sup>くわうろう</sup>の外<sup>ほか</sup>又植<sup>う</sup>石<sup>いし</sup>草<sup>くさ</sup>文<sup>ふみ</sup>へて植<sup>う</sup>す

慶長七年十二月四日<sup>よ</sup>ハ佛殿<sup>ぶつでん</sup>圓<sup>まん</sup>石<sup>いし</sup>と同<sup>ひと</sup>十五年右大臣秀<sup>ひで</sup>賴<sup>らい</sup>公<sup>くに</sup>  
あとぐく再<sup>ふたたび</sup>宮<sup>みや</sup>むる寛文<sup>かんぶん</sup>二年奉尊<sup>おんそん</sup>銅像<sup>どうぞう</sup>を改<sup>か</sup>て木像<sup>もくぞう</sup>と<sup>し</sup>め<sup>し</sup>ム  
左圓秀<sup>ひだり</sup>吉<sup>よし</sup>公<sup>くに</sup>は石塔婆<sup>せきとうば</sup>ハ佛殿<sup>ぶつでん</sup>を荀<sup>くじ</sup>山<sup>さん</sup>あり豊圓<sup>ほうえん</sup>崩<sup>くず</sup>て後<sup>あと</sup>再<sup>ふたたび</sup>宮<sup>みや</sup>  
とつ塔<sup>とう</sup>あれ石塔<sup>せきとう</sup>修<sup>しゆ</sup>みハ慶長十年九月<sup>くわうじょうじゅうがつ</sup>とあり

撞鐘堂<sup>とうきゆうどう</sup>ハ荀<sup>くじ</sup>山<sup>さん</sup>廻廊<sup>くわうろう</sup>以外<sup>ほか</sup>又<sup>また</sup>四間四方<sup>よんかん</sup>うして柱<sup>しゆ</sup>の數<sup>すう</sup>ハ十二本<sup>じゅうにほん</sup>うり鐘<sup>きゆう</sup>  
の高<sup>たか</sup>さを丈四尺<sup>じやうよんしゃく</sup>指<sup>さし</sup>す<sup>す</sup>厚<sup>あつ</sup>さを<sup>を</sup>す



洛東大佛餅の鑑觸の則  
方廣寺大佛殿建立の時  
よりは後後あり夢幻の  
眞味善哉て前山蕩に  
冬方一大陸放翁焼餅  
東坡湯餅小まおとうす  
名品唐被化の頃標榜へ  
正水代すとて代々いは  
一之近其名ある



耳塚みみづかの二王門の前より文禄元年朝鮮征伐の時小西將軍おざに加名犯かなぬるを大將だいじょうとして數萬そこなむの軍兵ぐんへいと首くびと日本にほんへこもさんと並ならぶされ

歎たん嘆たんして送おもてり所ところ埋う耳塚みみづかとす

平相ひらあい幽清盛ゆきよ公こう六波羅ろくはの舎やハ今いま大佛殿だいぶつでんと呼よば中央ちゅうおうみてゆか五糸ごじ面おもてに七糸しちじ面おもて假まり大和おおわ大須おおす門もんあと次平正ひらまさ忠盛ただよしを代しろの地じあり  
清盛きよよし公こう小糸こじてへ燒やか廣太ひろたてて殿舍でんしゃよハ珠玉じゅぎょく衣裳いじょう色いろ拂は開ひらみ香本かほん衣裳いじょう色いろ向むか方に大キおおきに池いけあり傍そばに水簾すみれんを造つくるまわば波池はいけと  
之の凡草宅ふんそうたく北救百七拾余宇ひやくしちようよ又また内府重盛うちふじゆよし公こう北居尾きたごお小松  
殿どのまで二十余時じ間殿宇でんう建續たつたり其外家臣眷属けいめい所しょ共千三百余  
宇うありとぞを悉悉滅亡めつりようの後ごもじ算さんわざを小滌奉時こりつまつど時房ときふさ等とうを失うしなて  
政道せいどう紙行しじゆう人ひと正慶二年五月千種中納言忠顯ちゆうけん赤松良忠あかまつ りょうちゆう大軍だいぐん以よ之  
六波羅役政ろくはの小滌時こりつ益仲ますなか時ど後あと伏ふ見上皇新帝じょうりょうしんていを供奉くふう—  
關東かんとうへ逃と繻よるに附つき六波羅ろくはの館やかた断ことぶ絶ぜつ



洛東五茶坂  
栗田只陶要  
井觀勝事領丈  
日守主制七  
夫々主事頭  
煎茶參拜  
捐下主事參拜  
多星風古の  
御とつじう臣

小松谷  
正林寺



小松谷正林寺ハ太佛殿の東小より宗首ハ塗土開基ハ惠空上人より  
本堂の殿舎造りみて九條殿なりの御參附と我壇上より秀忠大師  
の儀般安並に西の方に阿弥陀堂あり樓門の額ハ九條圓白尚實公の  
御筆之明れ年中にノタ所ニ此地ハモリ月輪禪定通實公の御所ニ  
小松殿と云法然上人は殿の佛堂にゆく由來と黒谷傳記があり  
手參する小松のモロ坂すもひて多景寺伝也と云ひ  
所ノクノ西人家の小姓方に名あり乞を小松谷と云小松因太臣重盛云  
のよ莊ひて燈籠堂の地うり委の盤裏記あり

三嶋明神のや一浜ハ馬町小例より當所の氏神みて產子ハ一代  
龜を禁ととひすり

継信忠信の石塔濱の馬町小例民家のう一浜小あり石代大塔二基銘  
曰永仁三年二月二十日願主法西とあり一基ハ銘さ

阿弥陀堂の豊國の後代山うり慶長ニ年豊臣秀吉云とば若小森りすり

清閑寺



清閑寺ハ小松谷の艮川にて佐伯公行れ建立たり奉尊ハ千丈觀音

の立像菩薩神の御化なり

高倉院の陵當寺小あり

治承五年四月十四日新院殿御清宗より火燐くき

新古

かく見し君の清を絶々とハナツの様と更に熟た 法や沈思

小督れ墓ハ陵のたのゆてあり高倉院の御影堂を當り攝町

中納言の女すり 妻は玉井也後盛裏也あり

歌 中山と清閑寺の小音耶ひの間をよ

寺役

もく清深すの真燕僧船と人便りある夕れ門前よとすうそり

く人をえねるわう參り立ちてとた女とよからゆとておち

憂心せうあいとあいひかくまゆまて清れへの西ハ行けとおなれ女

ひとてふよと人のことまくしてほどのたどりをもるき

とひ捨てて落とす矣うかば化人を仰みや其の後ふとおれ中よ

音羽山清水寺

南都院



椎中納言俊忠

官人  
小  
物

新勅撰

多  
少  
貳

考査の  
こと

ひりたそと

見る人

小  
人

官  
人

音羽山清水寺の奉尊十一面千手千眼觀世音菩薩脇侍毘沙門天

地藏菩薩

ナリト作當寺本國紋御小太和臣小源幸作海の延徳

玉

龜九条の友安後感もすありと本津川の邊りよりてアケバ

一の流

小金魚の光あり源氏御て直小少主ふ一流の游ゆう儀やまに

菊

花たる唐小白衣を着せる老翁あり延徳は唐小入く御身ハ

うね

人を翁也曰あ名より敵は地より院又二百步又及べり

常

常に千手直言を誦へ我貴僧と傳まと久一東にりんとす

泰

翁を御身をぞらくあんにゆり我は是木とみて大悲れ像を作

精

舍と達ん願あり岩連くくりねた御身我よりてけ称びと成

就

しゆくと延徳をゆすと爰れ告われた諱もくゆゆく翁の心

え

まうせある大い小怪を翁は東小向くく菴を歩くり走くり延徳は

所

小住なり或時ふ科の赤れ笠ひその翁の履を拾ひ延徳なりく

き

そひの翁の大悲の應現ましゆくとありがくゆく大悲乃

尊像を安坐せんと称びひみあぐらちりしたゞとして奉用と遙かに  
延暦十七年に將軍坂上田村丸春姫のうち小麻と稱してあまふ

小こけ入の茶菴小毛り延徳田村丸よ進て翁のうちせつて翁の

告り画材た渴仰のもの取る一属延徳の相ぬ紙アシテ神伝せめ

里即大士の化現すくんと信ひるやま一家に常てあ女小毛り

素れ曰つて病を治せんと多くれ殺生紙をばくじ難ひてぬく

金一具教小はりをく大歎れ尊像紙安坐一章すべりうだう乃利

益すりと支拂ひをあつせて親書あは達て延徳は寄附せんと紙

約とスリ歎きり掠り一疊本紙を親書紙御さんと紙紙人延徳

其夜辰中に十人の僧本く大歎の像紙修長八尺十一面四十臂并千本

觀音を造り終て十人の工僧行方とあくは養堂て忍立に織密する尊

容現一ゆひて目前ふあり當寺本まるそくまう佛殿を達セテアリ

嶺山みてアリもさうけまびいとむ憂りに其夜あくは麻まくらて

至もくに本地ふきせり六佛殿を造りて大悲行像般若安坐す。まわり鹿  
脇士地藏毘沙門天へ延請法師れ延命田村九延曆二十年に詔  
うけて東夷伝符の時此寺を小ぶり一ノ院を觀世音地藏毘沙門天彼  
俄場ふ現しめしてまことに延請しゆの日廿六年小田村九志延宿  
れ宣旨般若堂塔と建立。勅願所とし。又太日二年紫宸殿  
をあひて体藍とまし觀音寺改て清水寺と號せり

奥之院の本尊も千手觀音の立像うりは地ハ延請法師草菴  
のむすりとぞ  
阿弥陀堂を瀧山寺と號を奉るハの孫陀佛の坐像般若安坐度文治  
四年五月十五日法然上人瀧山寺そ不斬常行念佛を開闢しゆ  
今う小品轉る。朝倉堂主ハ越前守の國司朝倉守貞景是と達志  
田村堂主ハ田村將軍鈴鹿權現行歟延請等の像を安坐し  
鳥居水門の西小あり延請泉より地中より涌出する寒暑者に絶え

地主様現れや。後ハ太己貴命うり例祭ハ四月九日清水坂ハ坂脚  
れ赤き當山ハひくら橋の名所めにて裏も赤生の山。後  
入小クカリてさねぐをくわくわと散アモ瓢客れまし。後  
勅一盃の酒をひと飲すと詩をうたたり極く少短人も多く  
はけても喜色の回流す

音羽瀧ハ奥之院の下にあり瀧口三ト西のりへ前く四季鳴

減歌

音羽ふよやうに足どり向音波明ぬと歩き鳥のあゑ

高倉院

春音

みよよよに清かふは咲はせんふよよよのふざりり 為感

爪形觀音ハ悪七兵衛景清丸をとめて千手觀音波石面ふ聞

景清守奉るも傳の房室もあり

子安觀音ハ車舎馬止の南もあり光明皇后孝謙帝を奉産す。又  
より天照大神より授りゆす。安の觀音今本堂は後因より



大谷へ奉徳寺の廟所より當山初免の智恩院の境地よりて左中  
崇泰院小それを終り度長年中にはとて猶小河ノ川舊号  
浅水ノ大谷と称し當寺開山親鸞聖人の傳記云東山西  
麓鳥部野南を延仁寺に奉葬の由ゆるがとくちに遷と  
又さうり阿弥陀堂西面にて堂内小龍谷と云額あり寂如上の  
廟所の東にあり明菴堂と額あり日上人の對面所の應と面の  
さうした石藏あり當寺の什寶を藏む所となり俗云あれは窟と  
云

鳥越野或ひとも小ハ清水坂面ハ小松谷坂附也一もう然宗乃  
ノ

墓所

董其昌の御名のゆゑくノ山名榮乃高後成  
後京極政良公の墓ハ大谷の小御岸の上要法寺領もあり  
世人以て源義經の墓と云ふ近來未だ有石先生碑の銘文建る

靈鷲山正法寺の往昔傳教大师圓基よりて山門の別院なり中興  
國阿上人住りて宗旨を時宗と改む本堂を般若佛を安  
坐し阿弥陀堂の本尊ハ齒佛と号すが爲めに大谷御堂佛と號す  
天照右神宮の本堂の東廊下の上小あり山下の念佛堂ハ古然子金  
生幽阿上人ハ大菩薩云めて慈照ふく常に併勢左神宮へ足跡をえ  
ねて系之庭ある御道中より女形體骨あれ是故情て蘇通のうを被え  
化して上人の如仏例のひ慈悲弘う出を據えりと付勅めを  
をとくと系之故より衆の心を迷ひて是をどり足跡とのぐれを  
當山の坊舍へもく絶景すり洛陽れ萬戸鴨川大井川ヒニ流愛  
宕あじの峯名淀山清の通船モ書院より坐りて眼の下に處  
洛中の集會在遙ハ此院を備りて餉食應モ

雪の初夏ふとよどころみて眺望世人の渡々ふ  
寒いのびぬ日の夜のまことに都北者へ消みまくを



高臺寺



古山嶺

峯亭

中峰亭

安乐堂

政治廳舍

桂亭

文殊亭



鷲峰山高臺寺の慶長年中に左衛秀吉公北の政所御達立乃  
菩提所へ古ハ西云居寺小して自然居士はゆひたる宗旨禪

源家

中興開基を三江和尚うり

佛殿れ本尊ハ釋迦佛也兼阿難を安置に達磨大師の御厨  
子の政所公の御車を用ひらる方丈の東門へ秀吉公の御機板  
とて營一とし客殿南向ひて襖の画ハ太佐光信狩野永  
徳弘意ア溪等より歎物彩毫美麗をあざり奉書のふを親者  
を安坐した小方丈みハ秀吉公の詠ゆいし和歌十首を歌ふる  
聖護院道澄法親王の御筆と同上堂の額ハ重剛と奉して  
雪月堂の筆天井又政所公御車の上座が用ひう三江和尚  
常光院殿の像板安坐た祖堂より廊下を因縁として書  
月堂の額ありあね板写れハ秀吉公小の政所の御體合あり  
長押小三十六歌仙を以て画ハ土佐光信和尙ハ源智仁初王

の筆より具外内張の画ハ狩野古右京の筆多しとよ上筆  
亭ハ千利休が好む所より岩栖洞ハ良材山腹もあり古岩栖院  
の回遊あり

當寺ハ大本の楊柳株ありて妙樹すは花の盛ハ園中より寫  
を催一春絶情むのやもぐり多一又秋の頃も萩の花のみ  
まみやじやうにいろへて見る人わざく御紙題と墨當境せ佳觀  
あり

塔橋の下の坊中より

大坂の其の跡

八坂法觀寺ハ上宮を子の草創より古ハ樓門仰藍鎮守等處  
より破壊承經て今後又建  
五重塔一基本尊ハ大日如來也  
宝樹室御東りとて左子堂あり小のこれ小堂ハ  
藥師如來毘盧天歡喜天を安坐しむしニ淨藏貴所に事に住  
をありとて塔大少傾く淨藏塔あよ坐して持念に朝山毛利氏  
ノ子小塔正めにてえのめ元亨款書

意とも。

八坂法觀寺

ハ坂の頭へ久るを  
金剛の山の在るを  
御ゆく小庵院  
時既にとめべき  
日さむるにけり  
して塔のまふ牆  
きやれとめべき  
の人ゑせんと本戸  
ひづりそらでやれと  
これぞと與ト  
つぶ一夜春の隣  
とすか窓窓保  
延喜の後あて候  
今ハ絶てか



八坂庚申堂ハ塔の西小あり大黒山金剛寺延命院と号と奉る者有  
金剛山にて長ニ尺又寸大寶元年正月七日庚申小隆臨しゆく日を二庚  
申れ其二より 拝別四天王の凌草殿檻に聖徳太子大慈天を安坐し  
伽羅の観音ハ高麗寺の南又山内小あり青龍寺と号し奉尊を聖  
觀音長五尺の立像なり傳教大师は仰て仰歎歎歎歎歎歎歎歎歎  
臘太ハ地藏毘沙門を安坐し法陽観音仰りて其二より  
七觀音ハ庚申堂の小一町そり小あり宗旨の直言にて奉尊ハ七種  
の觀世音なり則七觀音院と號と中尊ぶは如意輪觀世音弘法  
大師の他より聖觀音千手准胝十一面馬頭不空罥赤等の六  
諸の像ハ春日よりとせ洛陽觀音也り其二より  
八坂といふ小山真葛原山の清水坂生の熱名なり其中にハツの  
坂あり祇園坂長樂寺坂下の原坂法觀寺坂靈山坂山井坂  
清水坂三象坂等なり

安井觀勝寺

やまと  
えいせうじ

新古今  
ほそひして

みれくも

あぬ  
あぬ

花流の  
はなりゅうの

きくも  
きくも

天曆  
てんりき



安井觀勝寺光明院へ安井御門跡前大僧正性演再興タケシマ  
藤田名所タケシマ崇徳天皇の后妃阿波内侍アハラノミツメ所アハラノミツメ位アハラノミツメ天皇保  
元の乱アハラノミツメ櫻坂園アハラノミツメ御門跡アハラノミツメはしくて御形アハラノミツメ足アハラノミツメ束帶アハラノミツメ尊經アハラノミツメ而随  
身二人の像紙アハラノミツメ畫アハラノミツメの地アハラノミツメより皇后小室アハラノミツメ送りゆく裏後天皇アハラノミツメ櫻坂深  
配所松山アハラノミツメ於アハラノミツメ太象經アハラノミツメを奉写アハラノミツメ和ち一首紙アハラノミツメ深アハラノミツメにて都の  
内アハラノミツメ小納名アハラノミツメとぞ差りゆふ

淡手毛アハラノミツメ御アハラノミツメ身アハラノミツメ松アハラノミツメ手アハラノミツメ紙アハラノミツメのみとぞく 講院

德アハラノミツメをアハラノミツメ納言入道信西奏アハラノミツメるるに舌呪咽アハラノミツメの御如アハラノミツメとぞく御經紙  
を通アハラノミツメしテ帝大アハラノミツメ小曠アハラノミツメとあひて太應王アハラノミツメとぞく天アハラノミツメ御服アハラノミツメを  
ひきとアハラノミツメ藝アハラノミツメ所指アハラノミツメの血アハラノミツメを取アハラノミツメて願文アハラノミツメを書アハラノミツメひの經アハラノミツメの相アハラノミツメ  
奉納龍宮城アハラノミツメを記アハラノミツメ堆塗アハラノミツメとづ海底アハラノミツメ小志アハラノミツメめゆすに海上アハラノミツメ火  
燃アハラノミツメて童子アハラノミツメ出アハラノミツメて衆端アハラノミツメを累紙アハラノミツメ拂アハラノミツメ施アハラノミツメして所願成就アハラノミツメとぞ宣アハラノミツメくま  
なり爪鑿アハラノミツメを截アハラノミツメ玉アハラノミツメ六アハラノミツメ年アハラノミツメを經アハラノミツメく長寬アハラノミツメ二アハラノミツメ年アハラノミツメ八アハラノミツメ月アハラノミツメ廿六アハラノミツメ日アハラノミツメ)

崩潰アハラノミツメしゆ御年四十アハラノミツメ後明松山の白峰アハラノミツメ葬アハラノミツメをする已上佛祖總アハラノミツメ史アハラノミツメより  
御靈アハラノミツメ地アハラノミツメ出來アハラノミツメて夜アハラノミツメく光アハラノミツメを放アハラノミツメ川故アハラノミツメ小光堂アハラノミツメとよもアハラノミツメ御佛アハラノミツメ大圓  
法師アハラノミツメとよも真言アハラノミツメ行アハラノミツメ名僧アハラノミツメは所アハラノミツメ事アハラノミツメの事アハラノミツメを示アハラノミツメすり大圓アハラノミツメあい紙アハラノミツメ奏達アハラノミツメ一詔アハラノミツメを蒙アハラノミツメりく  
堂塔アハラノミツメ建立アハラノミツメいかの尊靈アハラノミツメを鎮アハラノミツメ坐アハラノミツメあり光明院アハラノミツメと号アハラノミツメし佛殿アハラノミツメの  
奉尊アハラノミツメ准アハラノミツメ眞アハラノミツメ觀音アハラノミツメを安アハラノミツメ坐アハラノミツメあり又弘法大師アハラノミツメ像アハラノミツメあり奥アハラノミツメの林アハラノミツメを  
崇德天皇アハラノミツメ小の方金比羅アハラノミツメ權現アハラノミツメ有アハラノミツメ方源アハラノミツメ三位賴政アハラノミツメ世人アハラノミツメか  
りて安井の金毘羅アハラノミツメと称アハラノミツメ一都下アハラノミツメ諸人アハラノミツメ考アハラノミツメ小通アハラノミツメより崇德帝  
金比羅アハラノミツメ一日アハラノミツメ御アハラノミツメお光アハラノミツメの塵アハラノミツメを日アハラノミツメトアハラノミツメ權現アハラノミツメの明眸アハラノミツメをうれ  
りし利生靈驗アハラノミツメいちあらアハラノミツメそそくふる  
當寺の門前と新更科と号アハラノミツメ中秋アハラノミツメより浴湯アハラノミツメに験客アハラノミツメあらん集アハラノミツメりそ  
東山アハラノミツメの月アハラノミツメと賞アハラノミツメほ今アハラノミツメの家居アハラノミツメ繁アハラノミツメく遠アハラノミツメうじて風景アハラノミツメ寥アハラノミツメい

牛王地社へ下向原の道にあり祇園牛頭天王檜別屋峯うら神を鎮座  
し牛王地さうりとそ祇園百度余え奈社うらじ木と御し房の木と室す  
荀うれ例うりとそ下向原を百度大路と之名あり舊紀の方とより  
菊水井には所東方にあり燈泉みーと柔み可那う菊水の下流ば  
やくりみあり故ニ號るゝを

鰐池の右沿い下向原の西安井忽の通民家の奥小路もつて法院  
寺門跡尊性法親王性惠法親王住せ方小川坂敵と云四条の  
南うれを緩小路宮ノ号は慶運生緩小路とやひ後高倉の皇子  
天台座主ふそつう清一坐つて之徳久くまつて坐す住ゆひノ  
坂敵の棟よ脇せむれかそばの柱役さうくひづれ  
徒然抄緩小路宮坐せりすたに坂敵の棟にそりども繩といづれら  
徳久くま坐す二作み詠や鳥のむれかそばの柱役さうくひづれ  
塔一チサカ坐すと人の宿りあらと小坂敵の棟考ス長乐寺の脇寛律師を



下に原がむり  
を古の今も星の  
わち合川流と生  
て面のね原さり  
駿河の時代あしと  
下流もハ宮川と  
引し駿河より流れ  
きりゆくとせ世  
ぢりと白羽にて川飛  
ほり高橋透徹が傳と  
はくの歌舞の妓婦  
花や小出立て  
あくとくいきくん  
たくふうだぬ  
あくとくいきくん  
たくふうだぬ

あくと  
えくと



祇園社（下）の原紙面（上）多居（左）石柱（右）て感神院（左）とよ堅（右）

あり照高院道晃親王の筆より西南の樓門を拂隨身（左）牛頭天王

神殿れ中央（左）大政所（右）牛頭天王

素盞烏御靈

東（左）間（右）ハ王子（左）三女（右）西（左）間（右）ハ稻田姫

拂祇塞牛氏天皇成愛名郡（左）坂卿感神院（右）勸請

本門寺

聖武天皇れ御宇天平五年二月十八日吉備太守唐士より帰朝

時播廣國慶峯小幽祇（左）の御崇（右）其後常住寺（左）十津

師園如上人の神託（左）帝城守後（右）為貞觀十一年に遷座

あり中臣拔拔（左）小曰清和天皇貞觀十八年疫神崇祇（右）と世の

人疾小惱（左）也之故（右）亦之襄祖（左）良磨洛中の男女を將て六月七日

十四日疫神を神泉苑（左）よ遂（右）之（左）今り年（右）之（左）めく志川（右）け

タケモ神祇（左）もすたやくん昭宣公の拂殿（右）を拂（左）せりと神祇

くは祇園（左）の易常（右）殿舍造りと里紙猪舍（左）と後人又祇塞の

名紙かくり（左）拂祇（右）其深（左）紙（右）そくしんとせよとこれハ八十丈

小紙（左）かくじてう紙底（右）そくしん

善財前（左）素戔烏の御子野（右）後見殿（左）ハ大己貴命（右）と申其御社

末社（左）ハ圖画（右）よ乃（左）とすりえ山大師（右）ハ神殿東の庭の間（左）もありトウ安永

七年繪馬堂の西（左）西（右）と（左）日本略記（右）曰天延元年五月

藥師堂（左）ハ觀慶寺（右）と号（左）に奉尊（右）ハ藥師（左）如來（右）化ハ傳教大師（左）陽藏院

の勅願所（左）とて同墓ハ圓如上人（右）とス（左）富寺（右）の後拂

祇園拂靈會六月七日十四日山鉢の行粧祭禮の例式具外五月廿九日

六月十八日の神輿法（左）等世の神祇所（右）され委々記（左）と及（右）凡俗物

祭礼多（左）と（右）と（左）實（右）小考觀（左）ハ第（右）ハ第（左）見（右）ほくと（左）人（右）希

うり臨時祭（左）ハ近年三月十五日に拂乃（右）古（左）是（右）日走馬樂靈應御常

タ何モクケの神事（左）ハ元朝寅（右）の期（左）うり天（右）下安全拂祈請

うり

新古今  
櫻

遠ふるの

あくろの

ゆのく

あくね色

う節

在主の室



金玉山雙林寺



東大谷



東大谷  
本住寺  
日暮山  
山あり



金玉山雙林寺ハ高臺寺の小より古ハ天台宗の別院みて傳教大師  
の開基たり至徳年中國阿上人移住して時宗と改む奉る。其葉師  
如来みて傳教大師の化すり鎮宇ハ天照大神宮京社也。有り  
西行の高僧西行の塔あり。所に幽居し。之は建久九年二月十五日  
入寂。一丈四尺。當寺の塔ハ西行法師極めて。之は建久九年二月十五日  
性照の塔ハ平判官康頼入道す。ひやくによ在あり。そを逐流す。歸  
洛の後廬をもん経居して。うら音。般若心經。寶物集として。也  
語を去り。康頼は世より寶をあらわし。報し。眞の室ハ佛の室。也。故  
頸阿比塔あり。之が四条道場金蓮。もとにそんて後ハ双林寺に開居

寂。一丈四尺。當集の塔也。

當寺の院々も風景あり。洛陽文游の勝地。すり春秋。もく跡歌の

聲間。歎る。

太谷ハ双林寺小隣りて艮小あり。東平願寺。それ祖廟。すり阿比陀堂の  
本尊。ハ安阿彌の位。祀聖人の廟塔。ハ後の山腹。ふして頂上。小  
虎石。あり。石の形虎。又似。ねぞ名。と。不。石。不。ト。め。開山聖人。誕生  
の地。柳馬場。押小路。虎石。渺々秀吉公の御時。伏見城中。小移  
し。ゆり。其後。の地。入り。又。も。に。う。れ。と。聖人。北。墓。を。そ。先  
東平願寺の境内。七条の小。より。世の人。田地。を。ま。す。り。山。地。よ。遷。一。て  
元禄。集中。に。造。堂。あり。廟前。の。莊嚴。み。や。ら。や。う。に。微。妙。く。そ。く。孫。生。乃  
太谷の名義。ハ。初。名。す。載。る。花園。の。お。か。い。地。よ。移。す。も。移。多く。そ。く。孫。生。乃  
旧號。を。も。り。て。つ。る。き。

之は。美。被。継。を。き。せり。

東漸寺。李住寺。ハ。大。杏。の。面。よ。り。坐。り。て。ふ。腰。ふ。あり。其。又。日。蓮。宗。又  
一。て。李。住。寺。の。末。派。り。

直葛原。祇園林。の。お。ど。り。知恩院。の。面。を。つ。み。

祇園女房。の。旧。名。ハ。雙林。寺。門。あれ。小。より。東西。向。し。地。と。耕。せ。ん。と。れ。宋。家。を。

南北五箇。南北五箇。

東山長樂寺



遊長樂寺



路迷鷺嶺通靈崛  
眼渡鴨河望帝城  
心在空門齡已老  
須辭俗境脫簪纓

藤季經

園山安養寺

風さく

高麗原の

夕くれへ

秋の  
詠ふらるる

やまうせ

急急



東山長樂寺

ハ大谷の小よ儀々くづめ廻基ハ傳教大师ゆてまとも天

台れ別院

ヨリ當ふれ致景ハ唐士ハ長樂寺よ仰ぐと斯號

ト後ハ圓阿上人住む

して時宗とあくも奉尊ハ十一面觀音あり

傳教大师

唐士ヨリ歸朝アラタツル海より妙法龍神欣

モレ像紙

戴て來る大师禮拜渴作スルシテ勿急行スルシテかのる像衣乃

袖小施來

ヨリ當すれ奉る是モ聖座の下れ蟠龍カニラク大师御坐め

され謂うり己上

縁起辨財天社ありこれ神形も大师制作ありと鎮守

トシの借れ庭造

と相阿弥の住むて世よ名矣ナニヤ勝地うり

チ當山ハ洛東第一の風氣を風城九陌の太路小路

小路南の峯深の川渓波ゆき舟すと眼中鳥精れ客とぞ見る

蓮華水ハ隆寛律師

ヒム台宗の僧後ハ法然上人の弟子と見て

專修念佛の行者

と號り八十架みて寂に其時此の名甚花生ども

安濟帝御衣の幢

ハ當すれ付寶ハタケ母建れ門院御錦モタマセの付寶

時宗と改免圓阿上人住職

せりあくた盲人源照とつゝ者琵琶の妙曲

を奏せりハ又聽よ達し後小松院の恩寵を蒙り紫衣を褐ふ是盲人

紫衣の始くア源照

トめうち當ふに祈誓スルシテ世よ名譽あく

とねが人絶すして願全成就せりハ當寺の奉堂復建五

吉水の井ハ鎮守

えれ傍よありハタハタ其處シテ也

青蓮院宮降代

法親王灌頂の附アフの妙法開化アハノ

教源文に例式の列を乞

未臨しゆい拂よばり汲せらきとす

當山坊中れ書院

ハ界りて高構スルシテ清奇典麗スルシテ之方よ

庭中え石板臺を施設

と鑿ては毋段スルシテ綠樹蒼翠四季う

花絶スルシテ蹠跡の履れ音涼スルシテ中少も多藏

房眼の庭ハ相承の極スルシテ又後

法親王灌頂の附アフの妙法開化アハノ

教源文に例式の列を乞

未臨しゆい拂よばり汲せらきとす

當山坊中れ書院

ハ界りて高構スルシテ清奇典麗スルシテ之方よ

花絶スルシテ蹠跡の履れ音涼スルシテ中少も多藏

房眼の庭ハ相承の極スルシテ又後

法親王灌頂の附アフの妙法開化アハノ

教源文に例式の列を乞

知恩院



華頂山大谷寺知恩院の淨土宗の總本寺にて鎮西流義方元祖  
圓光大師宗風開發の垂延たゆて古水れ禪房とへ星野り初は東れ山接  
今れ勢至堂れ地（じ）かへて大師入寂（しゆく）の（の）とを  
（星霜がさうりて山門十三代の座主普蓮院慈法和尚法然上人の弘法後  
隨信へゆひ地を寄附しゆ人昔今れ圓山と越境一面して古水れ禪房とへ  
至つて台命を蒙る嶮岨を穿て平坦）今れめく仰藍浦建宮を  
路寒茅のえりく門又掲華頂山の額へ靈元法皇は震筆すり本堂大谷寺  
大慶きつゝ門又掲華頂山の額へ靈元法皇は震筆すり本堂大谷寺  
の額へ後奈良院れ震筆へ後圓弥の壇上み圓光大師の像般安坐に  
西の廻よへ翠簾を巻上す壇上に神牌を崇奉る大師れ廟塔は東の  
と上にあり勢至堂小掲知恩院の額へ後拍原院の震筆へ本尊  
勢至菩薩の安らぎの像を掲すゆる意像と紫雲の勢至堂の像小あり  
大師入寂の時聖衆來逐へ紫雲水面小駆き異香水氣小遣まつりと  
一心院へ其も小ありて本尊阿彌陀佛の像へ  
孫え祖大師の傳記を鑑小度他空ノ本南條権園の脣之父久末押頬深



時圓母ハ秦氏ハよりたる女ハ欲て夫婦諸よりんより佛神ハ祈ハシメテ秦氏ハ爰ハシメテ利刀ハを飲ハシメテ則ハシメテ姪身ハシメテより長承ハシメテ二年四月七日午前男子ハシメテ誕ハシメテ時宗ハシメテ空ハシメテ小たまびハシメテ白幡ハシメテ流燈ハシメテ鼓鑼ハシメテ西向ハシメテ棕ハシメテの本ハシメテ小止ハシメテ鉦鑼ハシメテ四方ハシメテ小しきハシメテ紋彩ハシメテ日ハシメテ小やハシメテかに七夜ハシメテを経て天ハシメテ小火ハシメテ是ハシメテうち櫛ハシメテ伏誕ハシメテ生棕ハシメテと号ハシメテ後ハシメテ小佛ハシメテ閣ハシメテを建て誕生ハシメテあと號ハシメテして今ハシメテあり赤子ハシメテの字ハシメテを勢至ハシメテと号ハシメテけ作るハシメテに號ハシメテをあ  
の鉢ハシメテうち敵智ハシメテかハシメテとももそれ西の壅ハシメテか向ハシメテの癖ハシメテありた奉ハシメテては圓の菩薩ハシメテ  
さの室ハシメテふ入ハシメテて學ハシメテ院ハシメテ玉効學ハシメテと人ハシメテ倩ハシメテ小火ハシメテの量ハシメテを勧ハシメテうへた是ハシメテ只ハシメテ口ハシメテ余ハシメテあは  
徒ハシメテ小意鄙ハシメテの塵ハシメテふほハシメテトハシメテ多ハシメテ紙冊ハシメテ三ハシメテ北敵山西塔ハシメテ小谷持寶坊源卷ハシメテりし  
ハシメテ効學ハシメテ書ハシメテ稿ハシメテ小曰進ハシメテ上ハシメテ大聖文殊ハシメテ一體ハシメテとわハシメテ時ハシメテ久安三年二月十三日入洛ハシメテと  
効學ハシメテ書ハシメテ持寶坊ハシメテ小曰進ハシメテ源卷ハシメテ紙冊ハシメテ則ハシメテ十五日ハシメテ登山ハシメテ  
上洛ハシメテせうハシメテ使者ハシメテタタハシメテへそく火ハシメテの聰明ハシメテうりより紙冊ハシメテセウハシメテ則ハシメテ十五日ハシメテ登山ハシメテ  
源光試ハシメテ小半ハシメテ四教義ハシメテ授ハシメテた義ハシメテをハシメテ不審ハシメテをうなだハシメテ教人ハシメテ所ハシメテる天ハシメテの要論ハシメテ  
あり不思議ハシメテのうにとひたハシメテ成廢ハシメテかハシメテといひぞうハシメテをきめつハシメテせんやハシメテ久安四年  
月八日小兜ハシメテを相具ハシメテて功德院ハシメテの阿闍梨ハシメテ皇國ハシメテと入室ハシメテやハシメテ皇國ハシメテ具ハシメテらばそれ  
うち伏聞ハシメテを發ハシメテて曰去ハシメテ夜ハシメテの差ハシメテに滿月室ハシメテ小入ハシメテとまくとくは人ハシメテを參ハシメテへと前北亨  
うを悦ハシメテうるは年十月左變ハシメテ利戒檜院ハシメテゆて左奈戒ハシメテをうそり斯ハシメテく患  
解ハシメテ天ハシメテ然ハシメテ而ハシメテ四教五時ハシメテの癡立ハシメテと云ハシメテ心三觀ハシメテのね理玉ハシメテをみく所ハシメテの義師ハシメテ  
の教ハシメテ小半ハシメテ不思議ハシメテ阿闍梨ハシメテ感ハシメテして曰學道ハシメテとある業ハシメテと云ハシメテ名名の株梁ハシメテとある事ハシメテと  
今ハシメテくもくもくした事ハシメテも又有利の業業ハシメテうりとく義師席ハシメテを辭ハシメテて久安六年九月  
十二日十八岁ハシメテ小一ハシメテ西塔黑谷ハシメテの慈眼房ハシメテ廢室ハシメテのりくに於ハシメテて被初推ハシメテらり廢道ハシメテの  
志願ハシメテふうれどハシメテ演ハシメテれどハシメテも來ハシメテて出離ハシメテの心ハシメテとむす是ハシメテが然道理ハシメテの聖ハシメテと  
感ハシメテして活燃房ハシメテとくハシメテ參ハシメテ名々源光の源ハシメテと廢空ハシメテの空ハシメテを揚ハシメテて源空ハシメテと號ハシメテうる黒谷ハシメテ  
蟇居ハシメテとくハシメテ出裏ハシメテを求ハシメテの心即ハシメテすと仰ハシメテの道ハシメテうつは死ハシメテを離ハシメテたと一切經ハシメテを  
披ハシメテセウハシメテ五遍ハシメテうつは諸ハシメテの經論ハシメテよつてほくハシメテ思惟ハシメテせうハシメテいれハシメテもくく  
あとも高ハシメテ遂ハシメテ小惠心ハシメテの付生要集ハシメテ并ハシメテ善道ハシメテ和尚の釋義ハシメテを云ハシメテ指ハシメテすとく  
の釋ハシメテへ亂相ハシメテの凡ハシメテ称名ハシメテの小うハシメテと順次ハシメテ小津ハシメテ小坐ハシメテと經省ハシメテを判ハシメテせり藏經ハシメテ

披覺の度小星を寂る事ニ遍ニ遂に真釋義一心專念弥陀名號行住坐卧不向  
時耶久近念不捨者是名正定之業願佛願故支小至りて末世の川主弥陀  
の名号を念へ被佛の願小參して造小淨土淨生般涅槃よりか伏して承安  
五年の春四十二歳にて餘りを捨て修念佛小歸入せりゆゑは然大の宗  
風日奉じありしへの愚徒三師破せんし或ハ大原にて回向わりくも  
皆念佛の理小跡せり延久一年の春の後鳥羽院の通鑑小よりて四五小劫遷  
されども承え元年十二月小劫許を蒙れ候て東方大台小圓極めノ又當山  
の地きり遂小達歷五年正月廿四日午刻法壽八十歲を遷化シテ冥界度月十  
有七日の間大法會あり勅令に依て師奉を仰一焉半の如きを壽也聖流傳以  
き阿蘭那の法身布金小滿モ法遷れ中日又ハ知恩院宮法親王御焼香あり寺  
務の大僧正を初未派の流僧大會の坐薦をして教禮渭作の分野在此不遠行極矣  
濟南賢大師の厚徳顯然たり贈りりり洛陽の貴紳被毛の者多く其妻子名  
氏生在黑門の前にあり即ち其妻子名姓不詳の者多く其妻子名姓不詳  
白川の水上に志賀の山城うち流せを東へ瀬を白川橋の名あり知恩院にて  
を西へ流る大和太源なり鴨川より源也

新載

法親王覺助

東三條金藏寺御孫堂ハ青蓮院御跡の院内うち二様の像ハ佛教大師の他  
當寺の大尊の本尊也と号ひ佛教大師唐士の持林一丈と云ふ者也其妻  
は室隱院崇教もと本尊あり其妻あはれ故感應してかして根立たぬに本尊を持林も  
義中にてゆくゆく故かねく貧窮をすりぬります小原にて本尊と号ひりあり  
尊勝院の丘小あり奉善院と云ふ大師の坐像シテ自他有り  
栗田天王や一ろの拂孫堂の東より奉殿の感神院新宮より例祭十九  
月十五日みて神龕一基鉢十五年あり白川の御堂をうる曲輪一と云ふの奥  
佛光寺の廟所ハ天王社の東隣する御院堂ハ明和九年中の事達みて  
左築たり廟堂みの開ヒ観音堂の畫像般安画也



栗田山  
日岡嶺

古今

うれめさは  
よせめと  
のくねり  
そめ  
ひの  
藻小  
やうら



華頂山親鸞聖人植髮の尊像の佛巻の廟所の東隣舊青蓮院跡の院内小社せし近事に據依かれし堂舍を遷して華頂山御坐と称し宗旨の三公よりて親鸞宗義を擧て正信偈文念佛本讚而文章等の勳行あり本尊は阿彌陀佛の坐像紙安坐して右邊上の厨子にしき殿を安置して左像うち小菴の直承小為夕梅の御名を承む也

甲形の指掌と看一雲綱縁の脛小左て兒童の脚を引けば其像も金剛有範相と拂母八幡を即我が拂母を對する義記れ息女うり聖人御奉り

八十代高僧院西う承安ニ年小聖人誕生カハ大藏冠録之曰圓孫出離道世の志願すしくられ九菴の善青蓮院慈祐和尚の許を翠れ發意雖然と號一室門徒渴作日かまつて繁昌の靈也

のひ佛丈子とうり範宴の絶言銀とあら奉る廢城多切る少少すと台止觀を明外遂に難行を捨て易行小劫至年紀念佛の流をも通ゆる無爲利根聖人の利弊一ゆく佛額をうしをれめ翠れ發を拂詔小袖並せらる足を植攀ける般と號一室門徒渴作日かまつて繁昌の靈也

粟田神明宮清和天皇中貞觀年中に勅詔一ゆく人  
東岩藏真性院の神明宮たのと上ふあら奉る八十一面觀音像安坐すむ  
王城の四方に銘玉を藏らる其石藏のアラ  
ふ中少日堂不刻拂あり毎朮六月廿八日千日清とく祥奉ねば所ハ安井御門跡の於みて當との本と陶工小可なり粟田牌清水坂の大窓剣は地の本を用  
跡上水むり源牛若九金賣吉次小具せし仁勝奥へ致れりヒ財平成の  
侍園石と市と/or者牛若の次が年小戲玉アリ成熾よケーハ牛若なると  
抜て今市を下ぐめ御答え紙多く代捨通りゆひくう乞づけ初一  
日固の岐みゆきニ兩外西よ四面ふみて其中小姓還方あり俗小姓が候と  
千本松門堂の御道の小よあり此の施事店へ地筋を安委本食上人  
位候を造る牛の勞を明く量敷水の石部の卷のゆきり勝る支畷の筋  
族人の渴を止むと/or  
碑の銘持待所ふあり  
佛廟野の日岡の東をアミ智太子の佛廟うらむし聖中にありて、從來の  
人馬駕から下り物候う通り久候つ事らく後は候されし忍れ矣  
上院ふようヒテよりぬ世かア十陵のオアリミ智太子の佛馬ふりて

山林  
花山

題句

小園詩

新續古  
名所山

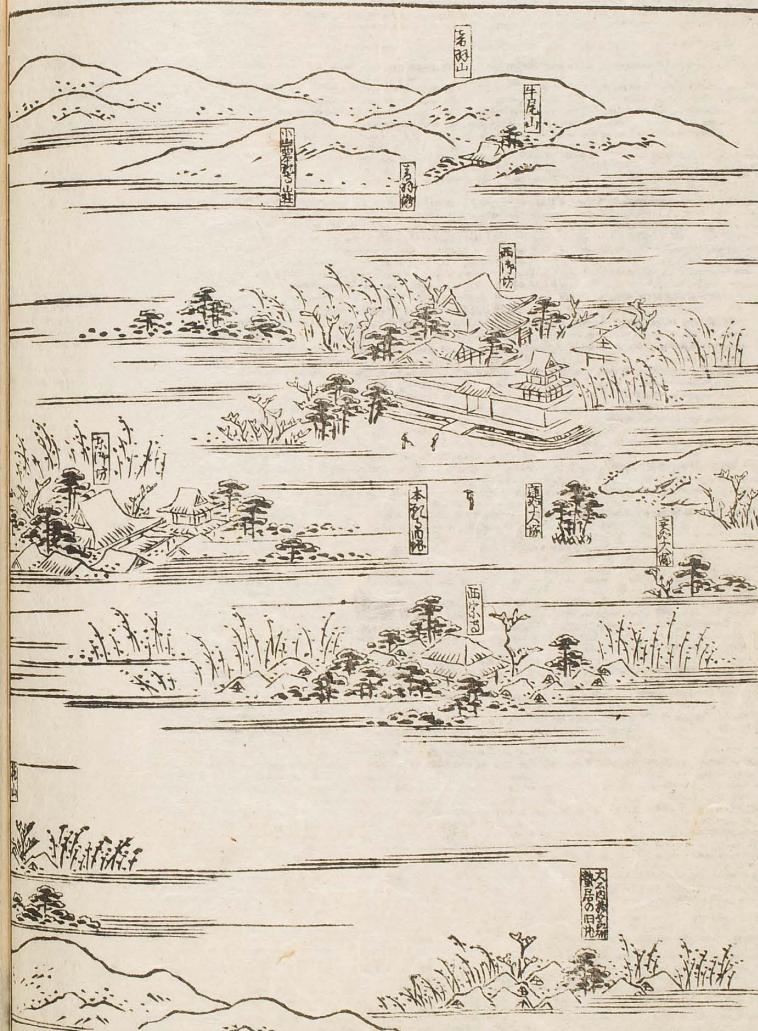
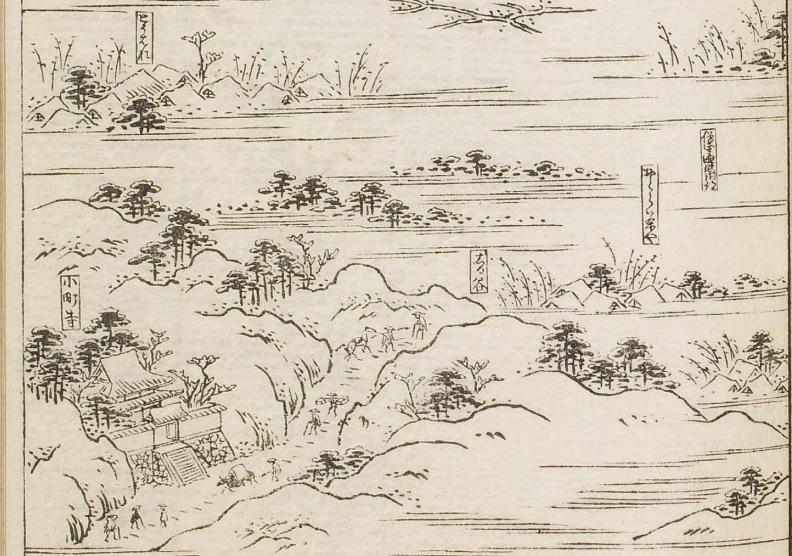
新續古

筆記  
刀入ねむ

園のさくら

さくら

多



ム科の里を狩りし鬼孫にて登えあり所より佛晬の歎止ふ  
所小寝を起建たり則佛晬石を陵の南小あり天皇の佛晬石の  
吉祥と安祥寺の佛晬の本より真言宗ゆて紀州高野山寶性院乃  
帶所守り俗姓んで高野堂と奉尊ハ一面觀者あり傍小地藏堂あり  
惠運僧都入唐の時將來一ゆて地藏るなり當寺の深殿皇妃の佛晬ゆて  
貞觀元年の達主うり初を故小如意ふよもく當寺の靈因うり  
ム科毘沙門堂の大石室より佛晬勢法親王うる奉るム科毘沙門堂の立

像みて開基の佛教大師うり

諸羽明神の社へ天兒屋根命天主玉命の二坐を鎮すり四の段  
牙四の宮徳々上ゆくもの無ゆる又今的小國城山流川  
古の庚太ゆて面の山並木御還の工橋乞く下流すれ様川とス  
廻地藏ハ諸羽の東より小野篁の作みて七道の辻の具一うり平清盛  
の金ありて西光法師の建立うり

音羽山み牛尾山より遡今から東南のむすりあ羽里小山村の通のやくぬ  
ありてはのム川ありゆゑて是羽川といふよし山林も羽游ゆて古より  
和歌多し山並乞く今西本願寺の別莊星野山  
て牛尾觀音堂ふ少る道小安羅石あり行脚居士の皆はム法腰掛石船床游  
御子能高羽游と後の右より仙人窟五丈巖をたの嶮をゆるかと  
四十小あり蛇が渦の險語のたふありて狂石ハ其右より

新舊撰

有羽川花喫ぬる一毫の園のあすくと白の香風

宗尊親王

續舊

えぞれ松吹風の有羽川ありも涼しふ乃トク

舊園寺道

詒生

えぞれ松吹風の有羽川ありも涼しふ乃トク

定家

時風のとある羽の里に近づれとおのれあひそへる一 前九大臣  
牛尾山法嚴寺の七圓の上小ゆゑ真言宗ゆて奉尊ハ一面觀者之まむて  
の佛作照士不動毘沙門天行脚居士延長法師の像は安樂院天智  
帝の社神明社あり 不動院天智院の像あつ黒泥製金生水の堂前より  
御澄ノ仰御品として供用金泥の曼陀羅と表写一のふと

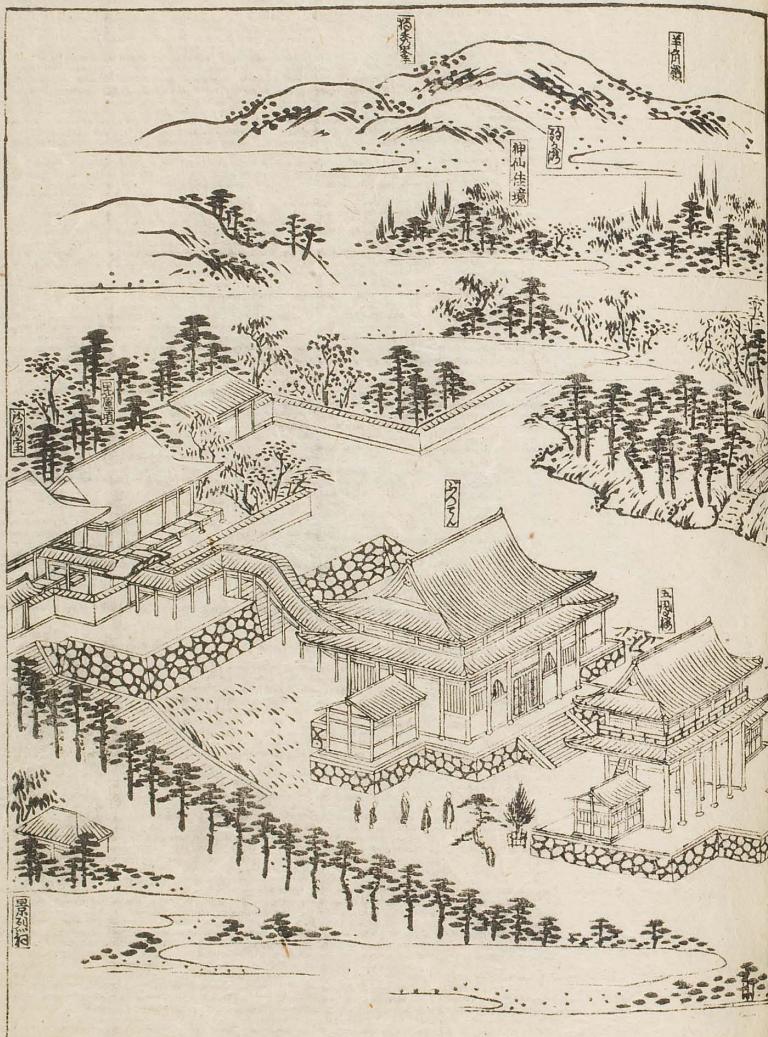


當るひしゝ  
 遍照院の高野川の水上紙舟と行處居士の舟を捨ひ本尊の化現ある  
 る故智者菩薩場へ洛陽(浪曲の場)小委(水車の故に清流も奥底と称)の  
 本願寺より旧地(花山)の垂小あつ身八代蓮如上人文明年中の建立之  
 實如證如三代住職(ゆき)の如して宗風繁茂して堂舍造りうら遂小供本定  
 賴(よ)み小圓(まどか)ゆ及(お)し妻(め)信長死(まつまつ)て信光(のぶみつ)  
 花山(はなやま)峰(ほう)の山林(さんりん)勝(かつ)利(り)と称(いふ)て東西(とうざい)奉(まつ)はれ懸所(けんじょ)二(ふた)もみ  
 蓮(れん)如(じゆ)上(じゆう)人の舊(きゅう)の西(にし)あつ實(じつ)如(じゆ)上(じゆう)の嫁(よめ)を守(まつ)る野村(のむら)三(さん)間(まん)もみ  
 花山(はなやま)峰(ほう)の東(ひがし)あつえ(え)まつ(まつ)い僧正(そうじゆう)遍(へん)照(じやう)院(いん)と大(だい)台(たい)家(け)あり  
 本尊(ほんそん)は薬師(やくし)如(じゆ)来(らい)遍(へん)照(じやう)の作(つくり)人(ひと)皇(こう)六(ろく)十五(じゅうご)代(だい)の帝(てい)寺(てい)すみ入りひて詔(せしめ)發(はつ)し  
 あ(あ)れと花山院(はなやまいん)とぞやある

續古

あ(あ)くう(う)れ(れ)い(い)あ(あ)ゆ(ゆ)れ(れ)い(い)の(の)ま(ま)や(や)ゑ(ゑ)ー(ー)た  
 菩(ぼ)提(だい)集(しゆ)滅(めつ)道(どう)と(と)ひ今(いま)は(は)瀟(さう)谷(こく)然(ぜん)と(と)ひ小(こ)川(がわ)幸(こう)玉(たま)草(くさ)地(じ)藏(ざう)り(り)名(めい)の(の)ま(ま)ゆ(ゆ)小(こ)野(の)

南禪寺



瑞龍山大平興國南禪寺唐の小なり舊龜山法皇住居と

岡山大明國師小褐て五山之上の號を蒙る當の記小曰 大上皇龜山

院弘安年中少卿也難宮をつらみの正應のうを宮中小あり

したるゆゑて嬪妃大ふうやまより陰陽頭小まね分ト巫してより故

寂勝光院僧正道智以接世小約の僧正と称し其靈のうと

當山分松惜して障亭をうなづり故小顯寧の諸師咒術巫祝小乃

を百計ひ共拱く同四年東福の釋普門當寺の御山の御園勅命を續く

二十の禪侶を率て宮中小安居只佑もしく被多分して坐禪した

物怪跡伏匿一上下安寝上皇庸感のあすり普門を祀て伽梨鉢

をうけゆ又宮をあくためく寺ある

室をうり上極の鳥鶴の画古法眼遂小令のて佛敵を創建の事多

之信水呑の虎探出にて紫名山釋か佛の坐像脇士ハ文殊普賢なり又金剛力士の二體を安置す

之方丈の壁像ハ脚絆のうを南の壁下より龜山の御牌を蒙る

傍小川連麿百丈臨濟の像弘安重慶佛殿小雲華堂山門は五鳳閣と

號して寛永年中藤堂高虎の再建なり庵ノ松を多く唐木乃

白檀二株山門の傍もあり石の大燈籠形り蓋石の寶瓶二つ引龍の紋あり

又地輪の上小文字あり 佐久間大膳亮平勝之寄進 續戸明神ハ

奉龍池の乾小あり墨富山の鎮守なり又行家の通称は継戸明神といふあり

安主は金地院の清宮年うて白砂に風凰竹を植り樹門を右へ隨身乃

像を垂當院の國祖の業和尚五山僧籍司の號を蒙る約の湖の東の家

獨秀峯小あり丈僧正道智常小引瀑布を愛し滅後小靈巖をうらみて

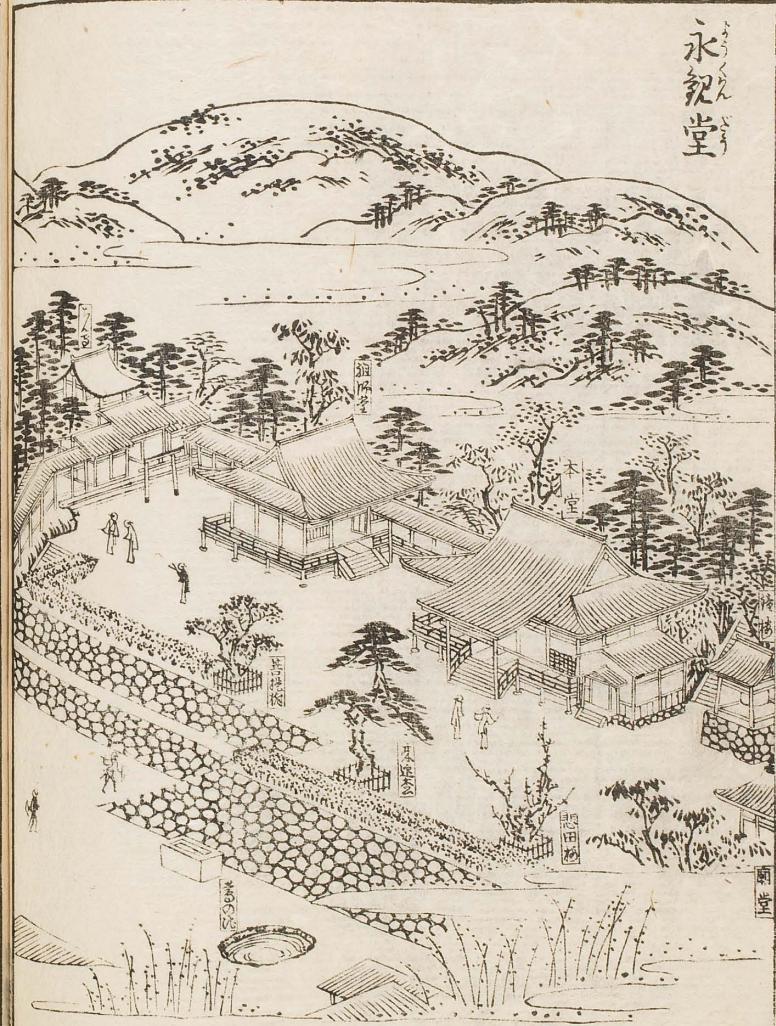
當寺の護法神也一社を湖の側よ達てあり神佳境と云ふ道智と

あり土人少ね紙舟小網が達て底水年中には南禪院へ龜山法皇の表教

傳英傑和尚大祠を造りて門の境致くさむとぞ南禪院へ龜山法皇の表教

禪林をまわして入出の傍あり

羊角嶺へ授院の東の峰をうあり





若王寺

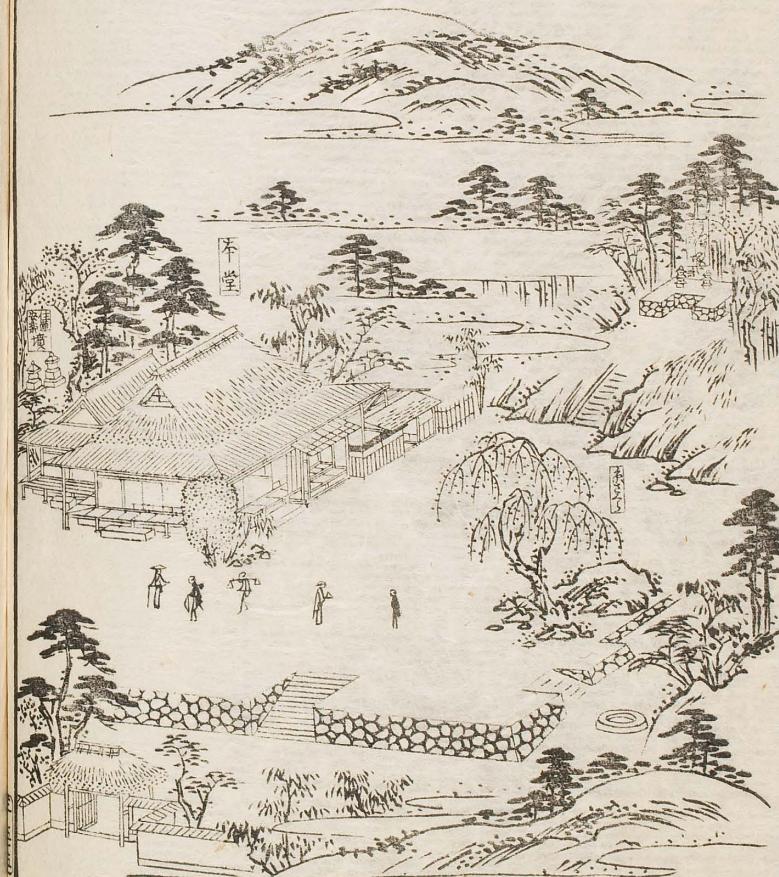
聖衆奉迎山禪林す水觀堂へ南禪まれ水の隠れ山のみて西山流之  
本堂の阿弥陀如来を顕す尊と號と長ニ余の立像あり當古の舊  
清和天皇の勅願所として真紹僧都れ草創ニ又中興の開基永親  
律師永保二年二月十五日晨朝衆僧より行道の念佛聲をあげたり  
信感はりうべし乾の方より走らしく躊躇せり奉尊檀よりさり  
のひて水觀とぞと顧命しゆ人律師感應を流し足そ末世乃死  
生を摂取引接の證うりとて自作の田舎紙記されしも 今當寺あり  
の皇子源觀僧都の才子あり南都東大寺の勅進僧小補（小補）と四十一年祖師堂小へ  
あつてせざる雨居（雨居）とぞくに身を被して往生する事の書を著せり 律師の尼山院  
善導大師（自他）圓光大師西山丈の二教を安立（安立）大知言義（義）盛經の恩詔  
遍は所小使して御室の城後撰集編披拂（披拂）と向慶慶の義を立（立）新賴卿  
ふくあいふ帰依（帰依）とす武運昌久の爲（爲）大政元鏡を轉授を具（具）外人（外人）經藏  
の額法海の二字の英傑高泉れまきり聖衆奉迎の松川堂あふありある  
夜四方に異香薰（薰）と音樂圓（圓）て其庵未集の挺ひい松の枝小より之  
山号は山中門のた小名化の学校あり舍トと称す 佛堂小其房殿

正東山若王子の水觀堂の小隣ノ天台宗みて修強道後葛城一聖  
護院小属なる社れ熊野二所權現宮の後向川法皇の勅活之傳あ若一  
王子を鎮座し觀音堂の那智山の本坊十一面觀世音を安置す  
其一南れ山下の傍あり那智の傍をうへて當みむく宮殿社殿子  
靈芝之山光延至山若王子の少隣る禪宗坐して南禪寺天授菴英仲惣の  
再興也佛殿の本尊は釋迦佛を安置す地ある付靈芝生長て光を空に  
映る如北臘より歎詠ありて靈場なり云はば感りて東福門院より當  
まを御建宮わくとく瑪瑙石の水洗鉢の佛觀後小を當寺の奇觀あり  
鹿谷の靈鑑寺御殿の前を赤茶色の談食谷の其事「一所斗はありやう」  
俊寛僧都の山莊あり新大納言房親平、宮康頼等が所より如真獄の赤茶峯小  
して樓門臨する本の古松四五本竹下小あり鹿谷八町游のち太余にて長  
安寺の湧水を近從に仰せ候て白玉巻を埋め合淨て  
万仞の首巖路を遙り其處を後退して良山城舎にて常く人跡稀き

靈芝山光雲寺



住蓮山安樂寺

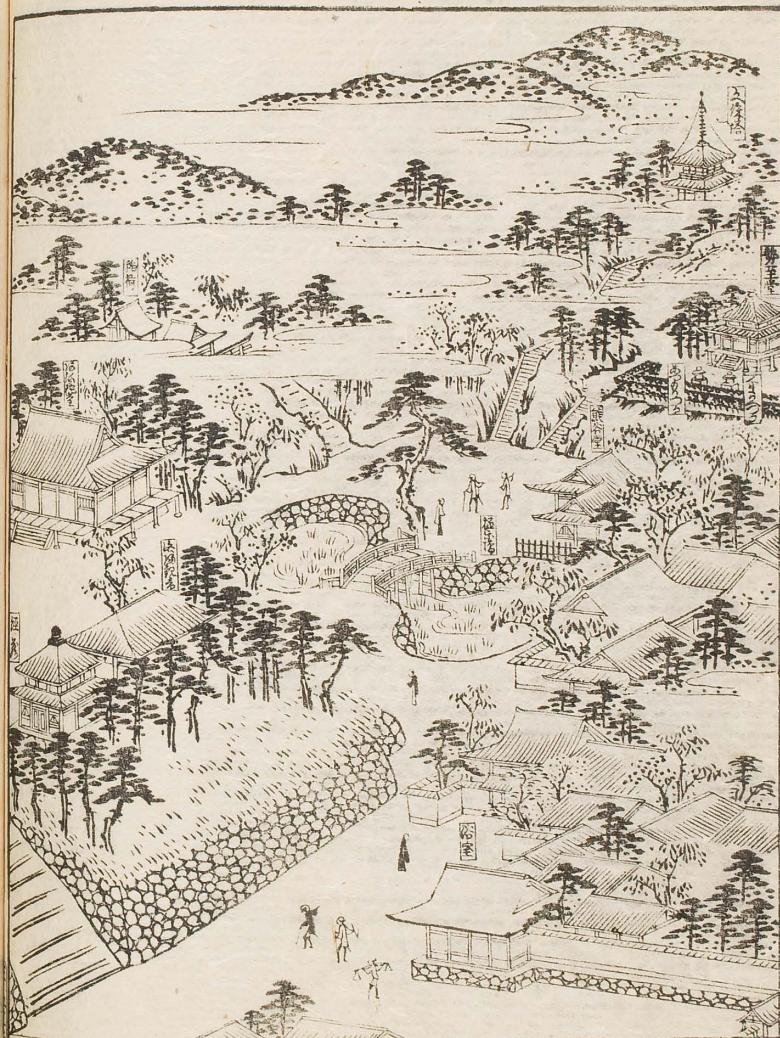


住蓮山安樂寺の鹿谷にあり奉尊の阿弥陀佛の坐像にて惠心代祀す  
關士の親多勢至を安樂共よ運慶代祀すと發當寺ハ法然より人  
如法念佛を修めし地なり徒亦住蓮安樂の僧小僧属しめし  
後鳥羽院の愛妃松虫鉢虫の二婦一而當修の勧入母んで千房室奉り  
尾戒上古玉太小逆鱗ありてテの僧を刑し法然上人を西園ふた遷を  
其後承経て念佛之法の因縁ありて般舟住蓮安樂の師を用ひて  
善喜山万葉すハ日所あり奉尊の阿弥陀佛の坐像にて惠心の作成  
万愚上人古の法然より人神房城宮古修多佛を修めし而證之該法然  
院も號を奉堂の前に銅像の地藏尊を安樂な客殿の庭小靈水を鉢  
を着奉水立あれば松風蕭然としての小鉢の音を六時禮讚の聲  
公幽谷小寂——寂寥——て峯の月やぐらすり蘆山の白蓮社  
くもたゞへらまて清淨无塵の佛界なり世ノ六字は此の多佛  
称名と被り



鹿谷 法然院

黒谷  
金戒光明寺



紫雲山金戒光明寺黒谷の澤上鎮西四ヶの一本ありえ祖圓光大師の

旧蹟にて敵山西塔の黒谷をうりて新黒谷と称し奉る小いえ祖

大師の像紙安立及脇壇の厨子小いえ親寢聖人の像あり共に自

化なり阿弥陀堂の本尊は専心の化なり親教堂の本尊は行基の

化なりて千手の像と安立

巡の其を教方至堂へ法然才今廟塔あり

則熱至堂の化教塔の化教塔の化教塔の化教塔の化教塔の化教塔の

化教塔の化教塔の化教塔の化教塔の化教塔の化教塔の化教塔の化教塔の

時もくもれをば五劫忍惟がなみぞとも



新繪古今  
万代を  
よ西より  
神樂岡  
吉田社

宿福院



吉田宮齊陽所ノ神樂圓小あり

神代の心を大體が神樂の名と小分合へ西方社

集はる神樂を奏す一興演で平成に

當社ハ清和天皇の御宇貞觀二年中納言山佐卿の勅請入一說小ト

延の造立

日本紀の樓門の額曰日本最上兩志神宮中の殿日本

最上神祇齊陽

御宇貞觀の年よりと奉參數入ス宮ニミ

日本神祇二千二十二座を鎮座一きり日本最上日高日宮の額曰

震筆天子宮の額曰後土門院の震筆日本國中一千餘座天祐也

祇八百萬神れ額曰清水谷實秋卿の筆之八神殿の額曰後土御門院乃

震筆社の大内裏の時神祇官小モハ州守後の驗神祇宗室もハ内

外の左神宮ハ八神殿の右小あり日本國中の神祇八神殿の兩殿

也

之あく又名ト奉神社數と花春日の社西の麓もあり是より落羽の氣清

きり其外松社ありと金玉寺

洛陽寺等の傳より日御坂の龍なり松原水からして所里あるとより龍坂

表日社の傳もあり日御坂の龍なり松原水からして所里あるとより龍坂

當所山の岡山小モハ嶺ノ山也

不疫萬流行て死るとの歎名次第帝主ハ不疫憲ひて諸の祈禱

也

弘通より又あら鷦鷯皇主神宮英主ありて末世元氣五一枚紙焉と

て急慢大師の神創り法然上人鷦下上人尊信ありて感應をひかし

本ノ弟ノ翠翠ノ當事を改て念佛の道場

也徒牙勢親房源智上人

小僧属ゆ

源智上人當事の二世として備中守

後醍醐天皇の御宇日本

源智上人當事の三世として備中守

不疫萬流行て死るとの歎名次第帝主ハ不疫憲ひて諸の祈禱

也

とくとも又に驗毛時小當事の八世善阿主ハ勅命ありて足を祈

ゆハ善阿主内れて又に毎日七日の間參佛

也

病氣よ退て天下安堵

也時修毛所帝大小戲感ありて號を百方遍と稱す

也時弘法大師の筆

也當時弘法大師の筆

不疫萬流行て死るとの歎名次第帝主ハ不疫憲ひて本師堂の釋迦來

建久年中小松内府重盛宋朝

也當時弘法大師の筆

也

興す不刻の阿弥陀經を寫る

也當時弘法大師の筆

也

其形を摸し示す

也當時弘法大師の筆

也

建久年中小松内府重盛宋朝

也當時弘法大師の筆

也

興す不刻の阿弥陀經を寫る

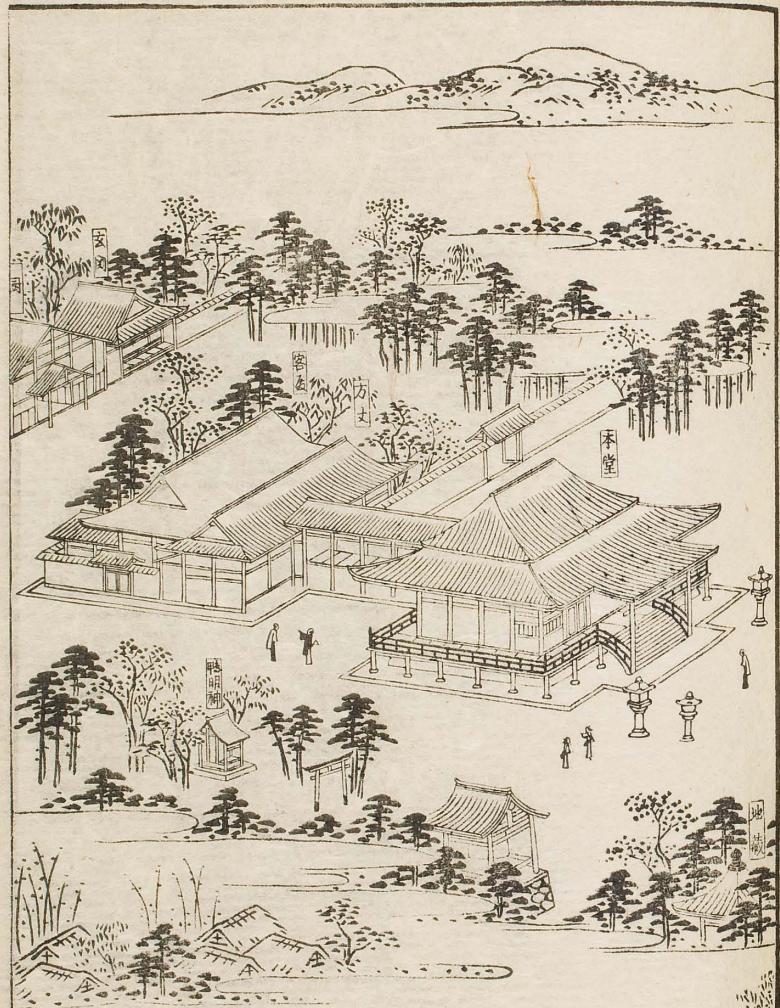
也當時弘法大師の筆

也

長徳山知恩寺

百萬遍

白川通



慈照寺ハ鹿ケ谷の小にあり、名銀閣寺とも稱し、一禪宗もして、巻窓

圓師を祖とし、原げ地ハ足利八代の將軍義政公文明十二年に  
世替を譲りて、廬居（ゆうこ）の別荘（べっそう）たり。故に東山殿（ひがしやまどの）と號す。延徳二年（西月七日）

薨（こう）トウル。その法名（ほうめい）は慈照院（じしょういん）。

遺命（いめい）にて、所を寺とし、法事（ほうじ）。

東求堂（とうくうどう）は、義政公の持佛堂（じぶつどう）にて、紀世音（きせいおん）を尊（そん）ひ、又慈照院（じしょういん）乃  
儀（ぎ）を安坐（あんざく）し、西の上壇（じょうだん）小から水引（みずひき）ハ濃紫（のうし）印金（いんこん）うり吉慶（よしきよ）申  
て、並（なが）み稀（まれ）見る奇物（きもの）を、若松（わかまつ）の画（ゑ）ハ相阿弥（さあみ）等（とう）等（とう）をもへ永納（えのな）れ。画（ゑ）之  
茶湯（ぢゃとう）の間（ま）四疊（よつてつ）室（しつ）にして、東山殿（ひがしやまど）の物（もの）數（すう）奇（き）うり。茶亭（ぢゃてい）四疊（よつてつ）半井（はんゐ）藍鷲（らんじゆ）

（らんじゆ）我が高貴（こうき）の賓客（ひんきつ）常（つね）に集（つ）まつて、茶（ぢゃ）の方（かた）紙樂（しへきやく）之（の）和漢（わかん）の奇（き）妙（めう）と

雅（まさ）かあれと後（あと）世（よの）小（ちい）びりと時代（じだい）也（よ）。

二重（にじゆう）の高閣（こうかく）あり。山鹿園（さんろくえん）より金閣（きんかく）にて、上（じょう）を金空（きんくう）殿（でん）下（げ）と、廟（廟）音（おん）閣（かく）とし、  
鎮守（ちんしゆ）八幡宮（はちまんぐう）の護國廟（ごこくびょう）と並（なが）く、閣（かく）之内（うち）に、捨（す）けたる龍（りゆう）蟠（はん）石（せき）、蹲（のむ）虎（とら）石（せき）、卧（のむ）牛（うし）石（せき）、伏（ふく）虎（とら）石（せき）、點頭（てんとう）石（せき）、布袋（ふたい）石（せき）、天柱（てんちう）石（せき）、雁（かり）峯（ほう）、香爐（こうろ）  
峯（ほう）、名（めい）石（せき）、秋（あき）石（せき）、北斗（ほくと）石（せき）、落星（らくせい）石（せき）、毒星（どくせい）石（せき）、濯（たく）石（せき）、謝（あや）公（こう）、塉（あら）公（こう）、塉（あら）石（せき）、大内（だいない）石（せき）、櫛（くし）柯（こ）、石（せき）、釣（つる）月（つき）臺（だい）、仙人（せんじん）、洲（しま）、  
鶴（つる）嶋（じま）、臨（りん）湖（こ）、臺（だい）、仙（せん）、草（くさ）、壇（だん）、あり。又、汝（な）れぬ、波（な）ま、川（な）ま、の、人（ひと）、桺（くわ）、鹿（しか）、  
東山（とうざん）、殿（だん）、れぬ。而（ひいて）、柔（じゅう）、道（みち）、相（あわ）、阿（あ）、弥（み）、台（だい）、命（めい）、を、蒙（も）、り、て、造（つくり）、り、て、中（なか）、れ、  
風（かぜ）、光（ひかる）、真（ま）、妙（めう）、みて、山（さん）、み、の、法（ほう）、式（しき）、を、そ、れ、と、四（よつ）、時（じ）、の、壯（さう）、觀（くわん）、足（あつ）、り、ぞ、と、之（の）、  
え、一（い）、代（だい）、庭（てい）、造（つくり）、の、軌（き）、範（はん）、と、そ、う、と、洞（とう）、庭（てい）、西（せい）、湖（こ）、も、掌（あて）、す、極（きわ）、  
瀨（な），も、因（い、そ、れ）、前（まへ）、か（か）、く、そ、て、壺（つぼ）、中（なか）、小（ちい）、川（かわ）、を、縫（なわ）、免（めん）、一（い）、粒（こ）、の、栗（くり）、中（なか）、に、日（ひ）、月（つき）、  
藏（くわ）、一（い）、う、神（かみ）、仙（せん）、術（じゆ）、あ（あ）、り、と、そ、り、え、み、り、

銀閣寺



（此卷之序文）

嘉永七年七月十六日の  
名塗大文字はあらへ  
祐國の後ふれども歳の  
じつに簾ははずすよ  
太合の佑藍ありあるゆふくら  
一月に圓滿の時け墨小松あり  
老眼をめらかくらむと暮る  
明のめうらと仰う先故  
幸多の石の地へ安坐す  
より一月其後弘法  
大師大文字はあらへ  
ゆき星宿墨を李  
のゆき壓（ひ）の東山松  
相國寺の猿川和尚  
命せしるのゆき  
化（か）かち少のゆき  
勧（けん）書の二事もさ  
九十ニ万ありゆき  
翁は自らの具



北白川ハ銀閣寺の小なり墨れ名ありて門を百家の中を西へ通る  
星す今所ニ白川の县一より

後搭あさり 本所れ人母とりどらるゝの御中おとこもかくやれたを匂ふと

民若郷長家

白川の裏れ梢こずえを尼廢せひき松マツも木の絶るきようされ

新後撰

酒さけ

秋あき

の夜よれ月つきも残のこりそ閑ひままし世よにせたからうね白川のみ

後頼

は里さとの落おちくろ近ちかの志賀坂車しがの往還おうかん志賀山城しが山素性そくせい佛師

君きみ代しろその名なつせりありたりとほくね白川の龍りゆう道みちの傍そばうて

日ひ法ほうと廻まわ一いっ川かわ半はんに捨すててそくめハ石いし手てにそくそく流ながすとき

引ひきむなきうそ谷たにの水みず游ゆ歴れきとて涼すずかくれの花はなと岩いわは流

清きよくとくそ皎潔こう潔る月つきの絶園ぜつえんとく橋はしのやくりに牛うし石いしとくとあり

歌うた牛うしは夕ゆふの夕ゆふ里さとうらかうらかに山さん中の里さとあり比叡ひだりの無動

寺てらまへまへ村むらとくまは細道ほそみちうり少すくない入いりるのうの一家いっけ又また川かわあはれ

小こくへりとも車くるまあく

志賀のふ然ふぜんりそ石井いそいのとくとくと相あわせひきうるの別べつりうる

志賀のふ然ふぜんみく

日ひ小こ風かぜのくけくろあくあくは流ながもあくね紅葉こうやうり

春道しゅうどう翁おきな

山さん中なか峰みねハ白川の里さとより

里さと生なま山さん本もとあふあふて山城やましろ近ちかの場ばとくとく長なが野の

山さん櫛くじらと櫛くじらしきけ峯みねをくたくた三さん井いのあけ入いれ相あいの達たつ志しがのうう風かぜあ鳴なづと

琵琶びわ湖この風景ふうけい一眼いつ眼の中に萬まん丈じょう勢せい揚あげくとくして如ごく繁はん榮さかりくとく仰あがり

千せん菜な山さん光福こうふくまへ百万遍まへ小こあり豊臣とよとみ秀吉ひでよし公きみ小こ千せん菜なを多く獻ささく

うりうり號ごうを揚あげるう俗ふつ小平こひら奉まつるうとた秋あき念佛ねぶつれ奉まつすうれ旨むすめ免許めんけい有あ例たと奉まつ

六ろく月つき六ろく日ひ近ちか鄉ごうくり集あつりとた秋あき念佛ねぶつを執行げきぎく

凡まん生なま山さん將軍じょうぐん地藏じぞうハ白川の小こにあり原はらひがひがの嶺れい小こあり寶ほう、曆十二年

し

也よ遷しと幸尊こうそんハ石佛せきぶつの地藏じぞう尊長そんじょう二尺にせきの儀ぎ、

細川暗あやえ將軍じょうぐん山さんに移い城じゆのす、長寧ちやうねい紀き。

又またより興慶こうけいへ多た孫そも族ぞく中なかに安寧あんねいでく

小白川





小山佛坊親鸞聖人の舊跡一乘寺の御中舞樂寺村小あり西をゑる  
懸所ありむづく山門の本院みて法堂嚴重きう境地小靈水あり  
故に聖水山舞乐寺と號と聖人處藏小あり財一家開發の志願頗尔  
して所小來り百日別行一靈水ゆて塔離一ゆき洛陽六角堂救  
世觀音にあゆみ巡運ひゆえある夜夏中に聖像を子此地より移向  
ありて生極乐の要文を授ひて是より化力本於の一流と云ふ世の危  
生滅化益ゆくを靈水鉢向石とめた佛堂れ東より永正年中そ  
堂金殿然らしき其後荒廢小なり奉教の九代實如上人御堂草創  
あり寂如上人の代小堂舍山林へ引き今山林を遊奉法  
如上人當帝主門徒小命せん再佛堂を建立一ゆき

詩仙堂の一乘寺村太王小至り南方みて石川大山の山莊にて小有洞  
の額あり中門の額ハ梅園諸侯の額ハ凸窓詩仙堂の額上六晴月樓  
下八峰要四壁互い漢晋唐宋本れ詩人二十六輩れ像が畫則其人の

詩を文ふる書をく画の狩野尚信と也故に詩仙堂とし

左一 謝靈運杜審言李白王維高適儲光羲韋應物韓愈劉禹錫李賀杜牧寒山

右一 陶潛鮑昭陳子昂杜甫孟浩然岑參王昌齡劉長卿柳宗元白居易盧仝李商隱靈巖

楚浦梅亮臣歐陽修黃庭堅陳與義尤十八

邵雍蘇舜欽蘇軾陳師道魯幾右十八

丈山歌墳の詩仙堂の異の方ゆだあり正保二年舞乐寺まねの中山

毒壇を築て頌仙祠と號をとす寛文十三年八月廿日卒と年齡九十葉

天王社へ一乘寺山下里松の東にあり古い舞乐寺のやへろどへ天王堂

を參り末社の諏訪八幡宮へしたが氏神として例祭二月五日より

赤山の社の修業寺村の東山下にあり其堂大師庵山下に帰朝のやた

明神の白羽の矢傷て船の上に祀一太台守護もうちより神社不

かれて其所に初請したる轉宅の節當社の神れを移す家に神前に如意の

梵字をと所から幸地堂へ地藏菩薩みて慈愛大師の祀り

玉山福荷社の高野村にあり原内裏小あり祠あり享保五年中止地

碑文所す



ハヤシの里人

いづへの

風俗

ありそ

男も

女のよ

繫を

くらしと繩

女も男も

腰を

肺を

腰を

腰を

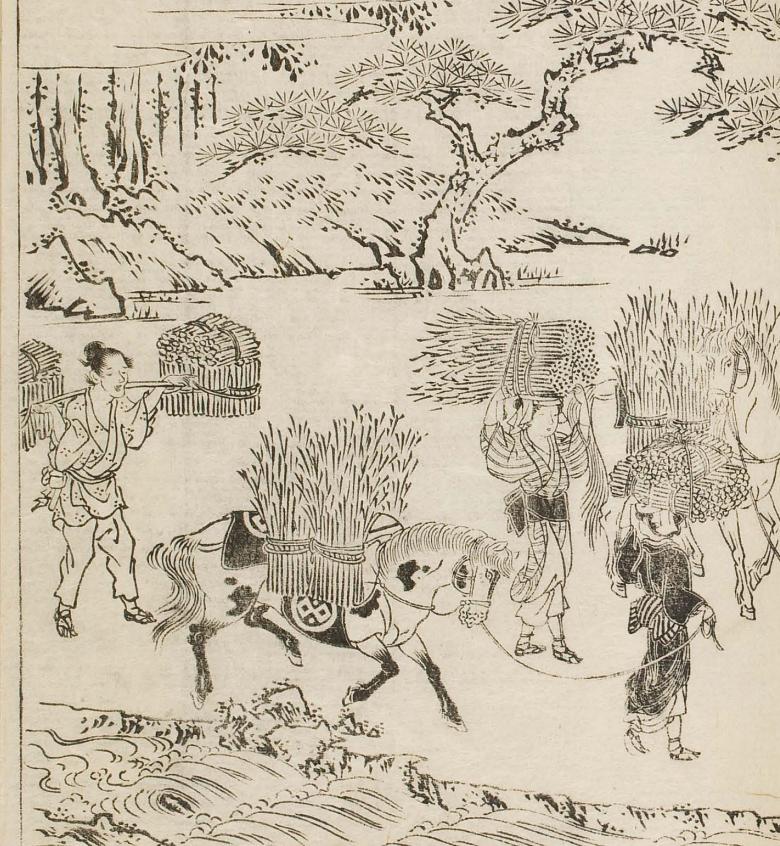
腰を

草鞋の

麻生の綿

黒きりぬけ

くさくせ



神陰社を獻との西れ麓高野川東小あり下階皇を神宮後臨乃

たる故小佛生とて例祭以四月中れ午の日より内裏を恒例

れ祭式魏々として民人騎馬をして列坐正一神るみハ錦蓋をかざ

楯鉾等の神具焉く列りあるあそて下駄れ神臨幸あり

御勅かけし祈りそのうとれよ人らもあわねのううせり 雅経

矢指の里ハ高野の廿町小小なり太武帝太友王すと位を簫そ山城の

少へ馳めし一時土子の軍兵追げまを射けられ神脅小矢中たり

はやへに名とくスハ御當所小竈風呂あく天武帝め矢の辻求參のうち

あらうひと始まり 今レ竈風呂七八軒ありそゆも圓名を名ガリ

竈風呂より青松系を焼功跡徳々と有り

大原ハ八瀬の小里小あり若狭街道にて東西小八の郷あり 沿之寺村

大長瀬村茶庭院村勝林院村

井出村野村草生村

舊日枚姉り雪け小ほきる炭竈打煙もしくて大原乃里

勅大原ハ云々は高祖の近々に雪うき往復とひあをやれ 西行

日枚姉り雪け小ほきる炭竈打煙もしくて大原乃里

或子因親主

融通寺の東延院村の云々にあり奉尊ハの御院佛の坐像

西方院 寶冠法師

惟喬親王遺沙へ上野村にあり 融通寺の五輪石塔あり御居の地

西方院 寶冠法師

湛慶の化現り開基良忍より人の像あり當寺融通念佛の開祖とえ治二年

足自他不平等融通を不可思議廣大の善功ありとぞ

魚山東延院ハ融通寺の東小隣を奉尊ニ二尊より中央ハ藥師佛

開基良忍上云々にせば巖嶺西塔の小谷より昔ハ坊舍一百余室

一寺り魚山と號するハ漢土の大台より西よ大原魚山と云へ所も大

台山の支ふすれとけ例えもいてきりくとも

音無瀬ハ東延院の東西町より荒泉ニ大余みて翠岩小僧ハ

て南へ落る蒼樹翁齋とて陰涼す承小徹一毛骨悚然

アシ近松アシ

小野山のアマリ花の遊の魚の青色のえく神さみ 西行

八瀬竈風呂

新續古謡譜

大

人

りと

すふ

夜それ

夜

とがま

あふと

ありと

清浦





かね井尾

つを

新古今  
世をそら  
うめりつこと  
ゑぬ下  
大原山ハ  
経ようり  
ひきまへ  
うづみ大原山の  
いとくしげれの  
數をうせ

和泉武ア



勝林院

茶通寺

融通院

呑吐川

高津川

大原  
勝林院

茶通院

融通院

呑吐川

高津川

小山

拾三

野山の事よりの歎れぬをすもへば所も炭を焼くと和お小屋と

古ふ木と朝か夕まよりはめそぞれをたどるがに岩壁

好忠

續拾三

夕うれひ多方空てゆるゆて秋風

小野れ篠原

藻夢門院

呂律川魚山勝川の勝川より南小河別を南を呂律川とし少法律川と名く漢土乃

銘捨敷呂川の小河わらべ河内山の山之御生師銘を神ふ居て法遊工人

井水の清水おやはのもとめりてはやく若くわく東海をはくと源を

世和井水石井の水をくわくと源を

井

銘捨敷はくとしのゆをとすと源を

井

熊谷腰挂石律川の橋南の傍より生出はくは所に

梶井宮圓融院利本房ハ呂の川の小河あり天台の座主少て諸門派

推てられ後祖と云當院即ち東方利本小河あり梶井の足りて今又西院の多

極樂院當院より惠心僧都の妹賣山庚翁の墓巖を燒神し前の奥よりとモ

護法石極樂院安養尼の庭室の田代あり古御所も

玉房梶井宮上人久く通す様をカタ

刀口こくらひみ神の刀められ揚花深のさと極や重ん

阿護法石當院の門前植の木あり一皇慶阿周利本房の儀あり重本房

寂源法師の艸創りもつて巌山の僧都卒覺超同慈慮院偏救と

して長七八佛エの祖康成の俗々當院へ徳た大徳雅信公の息がね入道

寂源法師の艸創りもつて巌山の僧都卒覺超同慈慮院偏救と

てひそれ縮朶のありたけ如本のあふ於て佛果の空不室の議論

ありうち免絶の不寧とのゆゑに如本相好死後偏救へ空の義法立

ゆく本門へ相好死あくへゆく終らず中道寶相とめ本のやえされ

とくかくもくよ於て尼とねまうせの人禮括院と称久又文治二年乃

被法然よと山門座主巌直法師紙始め法家大學徒と向事修む回答

仰りに法然上人對後論あくと本尊光明を放すと在行教大奈回答

とく法然教説ある上人のムラヒ休一顕真もたらすから當時の行者

とくり則法名淨坊よりひ獨念念佛縊ぞとす

實光坊勝林院の前あり後乳院の前あり法名常行堂

聖記を承安延年

惠心の他

製衣服かけ石明林院村の西あり皇帝は師人象を御もいといたる者も有り

製衣服の機と衣笠の役大なる者も御りて置たりばるよけしもく

實光坊勝林院の前あり後乳院の前あり法名常行堂

聖記を承安延年

惠心の他



古知谷阿弥陀院

古知谷光明山阿弥陀寺の勝林院より十八丁水うちより海まで  
本尊阿弥陀佛の惠心僧都の化すり當寺の開基禅哲言丈人尾張  
國あまの里小出生一幼名般彌釋丸と號を九岁的时生家一美濃國  
塚尾の親白日系翁一念佛諸行の勝と靈文般さげり生  
らり自行のたゞ金の店一あくらへ國へ紙經通一之花落小至り又東の  
樹紙通りゆふとて活かのりて紫雲空小靈壁光明赫々とくらむ  
所すれあれ爲慕て遂にし所小至り是と有縁の靈地すりやそ則一  
宇の堂舍を建立して是時頭小雪紙つゝてくら花羽阿弥陀佛  
一體を持身り本尊すみーゆと上人小あく入内翁とくろ方す一當寺  
寺再びとくら開山堂小ハ彈誓上人自化的像以安坐下  
御者より滅度の像と本像と云  
樹は其木本像と云  
芥生墨大系翁よりひくら和およ多く詠を  
大あら芥生の里はあり三りづく我身もとくらん 実家

寂光院

入

出

入

出

入

出

入

出

入

出

入

出

入

出

入

出

入

出

入

出

開居よりより今ふよりたもくう奉尊地藏菩薩ハ西國寺  
の拂化きり則門院の拂化阿波内侍の像あり應らうれの拂化打拂を

平成

後白川法皇太子御幸の時

地

み

の

極

り

て

浪

の

夜

れ

後門院

不動

千

萬

石

劍

の

佛

守

神

明

宮

岩窟

の

窟

の

窟

の

窟

の

窟

不動

千

萬

石

劍

の

佛

守

神

明

宮

岩窟

の

窟

の

窟

の

窟

の

窟

不動

千

萬

石

劍

の

佛

守

神

明

宮

岩窟

の

窟

の

窟

の

窟

の

窟

不動

千

萬

石

劍

の

佛

守

神

明

宮

岩窟

の

窟

の

窟

の

窟

の

窟

奈良寂光院



龍清

清水の寂光院の下より小ありて、うるるなるをあくにてわが

詠むるの数多きほのよ深々かうて月の絶の清水よやうりて霞まつれ

又月の皎きうはうにて清く退運法師もはゆ幽棲してはもほさん

大原やしゆ一寐然法師ハ月をとせんとやくに大原の里とすくも

今そくにあひの面よううこ歩くゆにすん歩りる

新拾  
水草ゆく鷺の清水庵院すか候五月の朝ハうづや



江文社

種不詳



日う大山  
樹す馬豆人の  
旋も叶う  
雙眸ふ遙り  
錦くそと  
政家御も魂と  
うこくゆひ  
佳境すり



巖嶽不動寺の峰  
う琵琶湖をぐる  
うえおろせば船く  
波や舟穂てり沖の  
舟のね方にかくれ  
や橋の松分々く  
きに翠れ姫媛の  
う淡のまゆ  
駒うあては良の高  
根の花吹くと  
詠一頼政の昔も  
おひ生れ侍  
王雄が山水む  
画賤小遠人小





上山延暦寺 東止觀院の奉朝五岳の真ツにて王城鬼門小當れば因  
 峰も號とす めハ日枝山と書 弘法氏を祀る宇延暦寺中に傳教  
 大師と歟慮波等し帝都鎮護して根室中堂が建堂へり  
 廬山と改く 廉樹大日枝小日枝等の号あり  
 新吉  
 阿蘇多羅二猿三菩薩の佛達 戒五抄冥かあせゆ 小傳教大師  
 菩提の愛染山の多抱なり且枝ら故とれ驗の富士を見ゆべからとれのうど  
 找立のあくらゆめゆくべれのうどいれゆくと 渡金度  
 東塔 止觀院と號と西塔摸川を合せて二塔と云ふ  
 東塔の東谷ふ十坊西谷二十坊南谷五十  
 根室中堂 二坊の谷す十二坊あり  
 康の五峰山の古伏りよ  
 文殊樓 釋迦文殊弘勒を安坐し講演不空弘  
 荷擔と云ひ戒壇下に在り  
 文殊を安置する堂也  
 大舍執行の少林院使系向の堂  
 山王院 有證大師の卒房すて  
 千手井 又名義水もしくは西塔自後千手堂す  
 干日義修もしく水を御用開供とせり  
 平相國清監熱病の時  
 淨土院 教大師の廟堂へ寂登と號と  
 俗姓の三津氏山川志賀守の人也

西塔

寶幢院と號を西塔の東合より南合まで十坊

常行堂

法華堂

本尊は普賢菩薩坐像あり。中合より南合まで塔院を営む。阿弥陀佛を安置する。宝幢院と號を西塔の東合より南合まで十坊

轉法輪堂

本尊は釋迦牟尼佛坐像あり。後小枝葉庵の後、延喜院に建て。宝幢院と號を西塔の東合より南合まで塔院を営む。

常行堂

本尊は阿彌陀佛坐像あり。常行堂と號を西塔の東合より南合まで塔院を営む。

安樂院

本尊は觀音菩薩坐像あり。安樂院と號を西塔の東合より南合まで塔院を営む。

橫川

楞嚴院と號を十四坊あり

中堂

本尊は觀音菩薩坐像あり。中堂と號を横川の北側に建立。延喜院と號を西塔の東合より南合まで塔院を営む。

福惠大師廟

本尊は觀音菩薩坐像あり。延喜院の東側に建立。延喜院と號を西塔の東合より南合まで塔院を営む。

四季講堂

本尊は觀音菩薩坐像あり。四季に開講される。

觀音堂

本尊は觀音菩薩坐像あり。觀音堂と號を西塔の東合より南合まで塔院を営む。

常行堂

本尊は觀音菩薩坐像あり。常行堂と號を西塔の東合より南合まで塔院を営む。

大師堂

本尊は觀音菩薩坐像あり。大師堂と號を西塔の東合より南合まで塔院を営む。

慈惠大師の堂

本尊は觀音菩薩坐像あり。慈惠大師の堂と號を西塔の東合より南合まで塔院を営む。

飯室

本尊は觀音菩薩坐像あり。飯室と號を西塔の東合より南合まで塔院を営む。

安樂院

本尊は觀音菩薩坐像あり。安樂院と號を西塔の東合より南合まで塔院を営む。

觀音堂

本尊は觀音菩薩坐像あり。觀音堂と號を西塔の東合より南合まで塔院を営む。

常行堂

本尊は觀音菩薩坐像あり。常行堂と號を西塔の東合より南合まで塔院を営む。

無動寺

本尊は觀音菩薩坐像あり。無動寺と號を西塔の東合より南合まで塔院を営む。

不動堂

本尊は觀音菩薩坐像あり。不動堂と號を西塔の東合より南合まで塔院を営む。

辨財天

本尊は觀音菩薩坐像あり。辨財天と號を西塔の東合より南合まで塔院を営む。

大乘院

本尊は觀音菩薩坐像あり。大乘院と號を西塔の東合より南合まで塔院を営む。

雲母不動堂

本尊は觀音菩薩坐像あり。雲母不動堂と號を西塔の東合より南合まで塔院を営む。

山王七社

本尊は觀音菩薩坐像あり。山王七社の堂と號を西塔の東合より南合まで塔院を営む。

當山名勝

本尊は觀音菩薩坐像あり。當山名勝と號を西塔の東合より南合まで塔院を営む。

あり舊神は石坂鐵く常光坊はもの前の懸巣にして中秋の明月は常に二ノ子坂  
 遠天に見ゆる。西塔千手院の大樹は大殿あり龍の口を仰ぐ。右へは岩の御堂にて  
 嵐院の後より青龍石はおとせんへて死と生の隣に座す。一七日か持つて勿れ  
 岩石をくわせ散つてまろ宗さへも宇治捨毛より。三尊石は大岩三ツ  
 めり山所五百羅漢石道より西の山の向の向の岩石參詮許  
 廉境をよし。五音鑑聖是定所阿字休息據路の傍  
 あり北嶺圓峯行者釋迦多寶佛あれゆきの邊に西ハルの里。假也ふ  
 王城か持修行の所く。阿字休息據路の傍  
 不比敵くらへ接引行方の山後主教す。阿字休息據路の傍  
 神代より白髮明神釣を垂し所すりやを  
 菩提樹圓塔不二門との足すり阿字院峯  
 又案被絨院塔の分地より阿字院峯忍心僧都経房本庭依頼せし所く  
 ともあゆり蟻塚路のむこうに石直は經小なり。通波通り一附  
 を用て佐木坂を下り尚希縣の名いを  
 すてけ所すりおゆゑて蟻塚と号す。竜池は龍神故廢居をとづて今も西を乞ふ  
 時うと護法石下にあり。如法水中堂の東の  
 井と詔法石下にあり。如法水中堂の東の  
 衣掛石和芳堂の阿弥陀堂宇葉佛堂を下りて遷供あり所く。高祖谷  
 戒心谷定家卿墓。移路あり。定家卿墓。移路あり。定家卿墓。登臨へばひた風寂す。絶景一の石小塔あり  
 踏たれしをあくさくくみけの木立す。劍  
 今ひふ崩て御寺

來らるるのむすらも羽の跡を残す。急  
 前たま川浦のあと年はそり老よしうし思ひの瀬。忠岑  
 おとす  
 沢中納言殿志り西坂亭のふねの龍の名す。藤原  
 おとす  
 おとす  
 おとす  
 おとす

今ひふ崩て御寺

來らるるのむすらも羽の跡を残す。急

前たま川浦のあと年はそり老よしうし思ひの瀬。忠岑

おとす  
 沢中納言殿志り西坂亭のふねの龍の名す。藤原

おとす  
 おとす  
 おとす  
 おとす

新勅

風雅

詩集

法性集

慈園

日吉山玉社へ比鹿山れ守護神うつ東坂奉にあり奉社七座攝社十四座

凡廿一社より例年四月中申日

大宮

伊弉諾尊  
奉地釋迦

十禪師

瓊々杵尊

二宮

國常御尊

正一位

河原陀

普賢

八王子

國後御尊

千手觀音

久上七社

高皇產靈尊

毘沙門天

不動

客人

伊弉諾尊  
奉地釋迦

下八王子宮

虛空藏菩薩

三宮

文殊菩薩

不動

早尾

高貴天王

大行事

高皇產靈尊

毘沙門天

不動

牛尊

六威天王

大將軍

小禪師

六威天王

岩瀧

藥師如來

新行事

藥師如來

聖真子

阿彌陀

普賢

八王子

國後御尊

千手觀音

高皇產靈尊

毘沙門天

不動

大龜

愛染明王

窟殿

吉備津姫命

金剛界大日

大日如來

氣比

仲哀天皇

聖忍天

金剛界大日

大日如來

金剛界大日

金剛界大日

金剛界大日

金剛界大日

金剛界大日

金剛界大日

金剛界大日

惡王子

愛染明王

若宮

圓覺菩薩

護國

金剛界大日

大日如來

氣比

仲哀天皇

聖忍天

金剛界大日

大日如來

金剛界大日

金剛界大日

金剛界大日

金剛界大日

金剛界大日

金剛界大日

篠原

聖真子

大龜

愛染明王

窟殿

金剛界大日

大日如來

氣比

仲哀天皇

聖忍天

金剛界大日

大日如來

金剛界大日

金剛界大日

金剛界大日

金剛界大日

金剛界大日

金剛界大日

篠原

聖真子

大龜

愛染明王

窟殿

金剛界大日

大日如來

氣比

仲哀天皇

聖忍天

金剛界大日

大日如來

金剛界大日

金剛界大日

金剛界大日

金剛界大日

金剛界大日

金剛界大日

やうこりをひへててのじめに西のさみれ秋乃よの月

那良仙

後醍醐天皇

日吉山玉社へ比鹿山れ守護神うつ東坂奉にあり奉社七座攝社十四座

久のこの天満日吉の神門月のうらも光るへり

尊

園

後醍醐天皇

三

八十

四

武庫川女子大学附属図書館

04464846